



千葉大学医学部同窓会報 第123号

題字 故 鈴木五郎 (大11卒 元るの は な 同窓会長)

編集発行者
千葉大学医学部
るの は な 同窓会報編集部
〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学医学部内
るの は な 同窓会
電話 (043) 202-3750
FAX (043) 202-3753
e-mail:idosokai@med.m.chiba-u.ac.jp

新春に寄せて

"Bridge the Gaps"

神奈川るの は な 会会長

富田 裕 (昭30)

皆様明けましておめでと
う御座います。

昨年末かまびすしかった
コンピュータ2000年問題も
無事クリアして、清々し
い紀元2000年を迎えられたこ
とと存じます。誠に御同慶
の至りと、お慶び申し上げ
ます。

さて皆様方は、ロータリー
クラブという団体をご存知
でしょうか。多分同窓の皆
様の中にはロータリークラ
ブの会員が多数おられると
思いますが、ロータリーク
ラブは国際的組織で、現在
ではロシア・中国を初め、
かつての東側諸国にまで広
がっております。国際ロー
タリーの頂点にあるのがR
I会長というポストで、多
くの国より選出された理事
の中から選ばれることになっ
ています。

R I会長になりますと、
最初の仕事はその年度の会
長指針を発表することです。
会長は任期1年ですから、
毎年この指針が発表される
こととなります。その内容
は会長の個性やお国柄、時
代を反映して、大変面白い

ものです。ちなみに今年度
の会長はカルロ・ラビッツ
アというイタリア人でした。
会長指針は

ROTARY 2000

ロータリー 2000

ACT WITH 活動は
CONSISTENCY 堅実
CREDIBILITY 信望
CONTINUITY 持続

というもので、世界100万人
会員へのメッセージとして
は冗長で、ピンと来ません。
私はロータリーに入会し
て今年で既に30年になりま
すが、最も記憶に残ってい
るメッセージは

"Bridge the Gaps"

というキーワードです。日
本のロータリーではこれを
"隔たりを取り除こう"と
訳していますが、ギャップ
に橋を架けようという原語
の方が、より適切に表現し
ているように思います。こ
れは190年にR I会長に就任
したウィリアム・E・ウォー
クというアメリカ人が発表
したものです。

当時は冷戦の真只中で、
アメリカはベトナム戦争の
泥沼の中にあった時でもあ

ります。恐らく彼は、東西
の融和による世界平和の実
現にロータリーが力を尽く
そうという思いを込めて、
これを作ったと思います。

1999年ベルリンの壁崩壊と
共に冷戦は終わり、世界に
平和が齎されたかのように
見えました。

しかしその後現代に到る
迄、世界的には人種間の、
宗教間の、先進国と途上国
間の、富める者と貧しいも
の間の等々、さまざまなギャ
ップはより深くなってきたよ
うに思われます。

ひるがえって、平和な我
が国でも様々な問題に直面
しています。少子高齢化問
題、いじめ、学校崩壊、家
庭内暴力、家庭崩壊：数え
切れません。

これらの根を辿ってみる
と、世代間の断絶という問
題に行き当たります。大人
達は口を開けば、今の若
い者は何を考えているかわ
からない"と言いますし、
若い者は自分達の文化(?)
にどっぷり浸って、やがて
自分達も大人になり、老人
になるという当たり前のこ
とを忘れている様です。
今社会に求められている
のは、まさに世代間の
"Bridge the Gaps"
ではないでしょうか。
私は神奈川るの は な 会

長としてこの言葉を胆に銘
じて、少しでも同窓の方々
に力を尽くしたいと思って
おります。
初春に当たって、考えの
一部を述べさせて頂きまし
た。
皆様方の方の本年の益々の
発展を祈って筆を措きます。
有難う存じました。

るの は な 同窓会賞

受賞候補者募集要項

第5回(二〇〇〇年度)るの は な 同窓会賞の受賞
候補者を左記により募集致します。

一、受賞対象者

①学術賞 本会員(甲および乙)で、医学研究あ
るいは医療活動の顕著な業績により、学術
的あるいは社会的に高い貢献をした個人ま
たはグループ。特に学外での教育研究診療機
関に居られる方と、学内では学位取得直後
の層からの応募を歓迎いたします。

②功労賞 医学および広く文化の各領域において、
千葉大学医学部および千葉大学るの は な 同
窓会に多大の貢献をした者。

二、表彰

①学術賞(三件以内) 楯および副賞(総額百五十
万円程度)を贈呈します。

②功労賞(一二件) 楯および薄謝を贈呈します。
三、応募方法
所定の申請用紙により、二〇〇〇年1月5日か
ら3月15日までの間に申請して下さい。

四、受賞者の決定
選考委員、常任理事会の議を経て、会長が行いま
す。

審査結果は二〇〇〇年五月中頃までに各申請者
に通知すると共に、るの は な 同窓会報に掲載する。
五、問い合わせおよび申請用紙請求先
千葉大学医学部内 るの は な 同窓会事務局

右選考は、「るの は な 同窓会賞選考規定」(るの は
な 同窓会報第一一六号参照)にもとづいて行われま
す。

最終講義・記念式典

の二案内

一、最終講義

○嶋田裕教授

日時 平成12年1月28日(金)

午後2時30分

場所 医学部附属病院第一

講堂

演題 「筋原線維形成のメ

カニズムとダイナミ

クス」

○佐藤甫夫教授

日時 平成12年2月9日(水)

午後3時30分

場所 医学部附属病院第一

講堂

演題 「精神運動発作をめ

ぐる」

二、記念式典(合同)

日時 平成12年3月11日(土)

午後2時00分

場所 医学部附属病院第一

講堂

○記念講演

日時 平成12年3月11日(土)

午後3時30分

場所 医学部附属病院第一

講堂

演者 厚生省健康政策局長

伊藤雅治

演題 「医療改革と大学病

院の役割」

○祝賀会

日時 平成12年3月11日(土)

午後4時30分

場所 医学部附属病院第三

講堂

千葉大学創立50周年記念式典・講演会・祝賀会挙行される

千葉大学は、昭和24年5月に新制大学として創立され、今年で50周年を迎えたので、それを記念して11月5日に幕張プリンスホテルで創立50周年記念式典、記念講演及び記念祝賀会を挙行した。

式典には、学内外の関係者約800名が出席、始めに千葉大学管弦楽団による国歌、大学祝典序曲の演奏の後、磯野可一学長がこれまでの支援と協力に感謝するとともに、「千葉大学が今から歩まんとしている第一歩は、新しく生まれ変わった大学としてのものであり、私達はそのいしずえ(礎)となるものである。」と式辞を述べた。



千葉大学創立50周年記念祝賀会



千葉大学創立50周年記念式典

市長、蓮實重彦 国立大学協会会長(荒川正昭 新潟大学長代読)等の来賓祝辞祝電披露に引き続き、亀井正夫 住友電気工業(株)相談役による「21世紀への日本の進路」と題した記念講演があった。

その後、記念祝賀会が開催され、学長挨拶、沼田武千葉県知事、吉川弘之 放送大学長、井出源四郎 元千葉大学長の来賓祝辞、吉成儀 創立50周年記念事業後援会会長への感謝状贈呈、鏡開きに続き、吉原三郎前(株)千葉県経営者協会会長の発声により祝杯を挙げた。また、記念品として同大学園芸学部で育てたシクラメンが出席者全員に配られ、文字どおり式典に花を添えた。

附属病院 ニュース

病院長 山浦 晶(昭40)

○病院はボランティアの受け入れを開始した(8月)
ボランティア協会へ依頼することは簡単であろうが、学生に患者の立場にたつて病院を見てもらいたいとの考えから、学生ボランティアを期待していた。助産婦学校の学生5名がボランティアの先駆となった。

○病院改修工事は本館ですでに終了し、母子棟・精神科棟の工事を始める(8月12日~11月中旬)
この一連の工事で病棟は一新し、特にトイレ・浴室等は便利になった。今後はアメニティを考慮し、4床と個室のみの構成にすべく新棟建設の概算要求を提出した。

○西暦2000年問題の大演習を行った(9月18日)
国立大学附属病院では最大の演習となった。午前中はコンピュータを2000年1月4日に設定し模擬事業を使つて稼働してみた。午後からは実際に停電とし、非常電源の給電状況を確認した。準備段階から日本テレビが取材を行い10月20日に放映された。また、10月28日にはMINCS-UH(Chiba Medical Information Network by Communications Satellite for University Hospitals, 大学病院衛星医療情報ネットワーク)の千葉大学附属病院開局記念番組「2000年問題対策演習の結果と評価」としてさらに詳しく他大学に放映した。

○医療福祉部にメディカル・ソーシャル・ワーカー(MSW)2名を配置(10月1日)
MSW採用は国立大学附属病院では東大に次いで2番目の採用と思われる。今日では200床に1名のMSWが必要とされているこの職種が、ようやく採用され、患者本位の医療に貢献することが期待される。

1年を通して病院の庭に花が咲いていた心が和むであろう。園芸学部の協力を得て6月(撫子など)、8月(ポーチュラカ)に引き続き、10月にもグリーンベルトに植栽し立木の剪定を行った。地下正面出入口にある池には、篤志家の寄付による錦鯉が加えられ、患者のみならず職員の憩いの場となっている。

平成11年11月

千葉大学医学部 第一外科学教室開講110周年 記念祝賀会開催される



千葉大学医学部の外科教室の歴史をさかのぼると110年前の1890年(明治22年)に初代外科教授として東京帝國大学より三輪徳寛先生が

この原稿を書きながら、思い出したことがある。先日沖繩に講演に招かれた折、本学出身の多くの医師に久しぶりに会えた。その内のお一人が、「遠く千葉から離れていると千葉大学のことが懐かし、あのはな新聞は隅から隅まで読んでいます」と言われていたことである。すこしでも良いニュースをお送りしたいと思う。

(1975~1980年、昭和50~55年)、第6代目教授として奥井勝二先生(1980~1991年、昭和55~平成3年)、第7代目教授として中島伸之先生(1991年、平成3年)が各々就任され現在に至っている。千葉大学外科教室の始まりを起として、第一外科学教室開講110周年記念祝賀会が昨年11月14日(日)に千葉市の幕張プリンスホテルにおいて第一外科学教室および第一外科同門会の主催で開催された。当日は絶好の晴天に恵まれ、教室内外より500名を超える人達の参加者を得る事が出来、大変な盛会裡でありました。祝賀会は午後1時より参加者の挨拶に引き続き記念講演会がなされ、午後6時から懇親会が開催された。当日、御出席頂いた教室外の方々、ならびに同門の方々に本誌面をお借りして厚く御礼申し上げます。次第であります。

お知らせ

あのはな同窓会事務局では、卒業年次別クラス名簿リスト、地域別会員リストおよび郵送用住所ラベルをご希望により作成いたします。詳細は同窓会事務局にお問い合わせ下さい。

日本対ガン協会賞を受賞して

安房医師会長 青木

謹 (昭36)

平成11年度がん制圧全国大会が平成11年9月10日新潟市新潟県民会館で開催され、その席上で、安房医師会は、がん予防に功績があったとして日本対ガン協会賞(4個人4団体)を贈られました。

本紙編集長より、この事について投稿するように依頼されました。安房医師会の胃集団検診など、がん検診活動は、昭和43年以来、第一外科前教授奥井勝二先生をはじめとする千葉大学(ゐのはな同窓会員)の御指導御協力のお陰で今回の受賞にもなりましたので敢えて筆をとらせて頂きました。

1. 対ガン協会賞受賞理由 今回の受賞は次のような事が評価されました。

安房医師会は、昭和43年から安房郡市11市町村の一



部地域より順次範囲を拡げ地域住民の胃集団検診を行って来ましたが、胃検診にとどまらず昭和53年より肺がん、乳がん、昭和60年より子宮がん、喉頭がん、昭和62年より大腸がんそして一部市町村では前立腺がん(現在はPSA法のみ)、肝臓がん(EGG抗体)など

検診部位を拡大している事。又、毎年2月、医師会、結核予防会、保健所、市町村、千葉大関係者等で、住民検診会議を開き、当年度の検診成績を総括し、次年度検診全日程・重点目標を決定している事。

そして、最も評価されているものは、胃集検に於いて、間接撮影フィルムを読む影後、安房医師会病院で精密検査を行い、発見胃癌については医師会病院で手術し、術後は定期検査を施し、一貫管理をしている事です。

2. 応募のきっかけ 某大学K先生が「がん検診百害あって一利なし」などとそれに類した本を出版しベ

ストセラーになっておりました。住民がそれを読んで誤解し、検診を受ける事を躊躇したり、現場の看護婦が

疑念を抱いたりしている事態に對し(この事ばかりではないと思いますが)、厚生省

は平成8年東北大学久道茂教授を総括班長としてがん検診の有効性評価に関する研究班を設置しました。そして、平成10年3月、その報告書が出来上がり、「がん検診の有効性等に関する情報提供のための手引き」として、全国の保健所及び市

町村すべてにその冊子は送付されました。その研究班報告書に、私共安房医師会の胃集検を評価する論文が採用されてあったのです。

安房医師会新病院がもうじき完成するその景気づけにもなりますので、このチャンスで逸するなとばかり、協会賞に応募致しました。

その採用された論文は、安房医師会副会長原久弥氏(昭34)が丹念にデータを集めたものを阿部陽介氏が統計処理したもので、「case-control study」の手法を用いた胃がん死亡減少に対する胃癌集団検診の効果の疫学的評価―胃集検の効率化の検討―と題され、日本消化器病学会雑誌(1995)に掲載されたものです。

その論文に對しての研究班手引きの評価は、長所として(1)サンプル数が多く、年令別の評価が受診間隔別の評価のような層別分析の信頼性が高い。

(2)検診実施機関のファイルを用いて受診歴を調査しており、測定バイアスが排除されている。

(3)対照の代表性を確保する為に、死亡票を用いて、症例集積期間の住民台帳を再構築して対照を抽出している。

短所として (1)症例の全数が地域がん登録により確定された者ではない。(2)セルフセレクトションバイアスが制御されていない。としており、更にコメントとして、わが国の胃がん検診の評価の症例対照研究では最も大きいサンプルサイズで行われた研究である。と結んでおります。

3. 胃集検と第一外科 安房医師会は、昭和39年に安房医師会病院を創設し、千葉大学第一内科と第一外科から医師を派遣して戴きました。新しい試みの紹介外来制でありましたので、入院患者が少なく、その打開策に苦慮しておりました。

昭和43年、新しく安房医師会会長に就任した白幡静夫氏(昭13・故人)、理事磯山健一氏(専20・故人)が中心と

なり、当時第一外科綿貫重雄教授の御厚意で、胃集団検診を開始しました。この検診活動の礎を作ったのが当時第一外科講師の奥井勝二先生(現安房医師会病院顧問)、窪田博吉先生(昭20)第一内科日暮協先生(日大昭32)でした。

奥井先生は、昭和43年から昭和55年迄、胃集検に直接関与して下さり、胃集検間接撮影写真の読影、毎月4〜5回の来院、精検の指導、発見胃がんの手術、術後フォローの指導など、私共安房医師会の検診活動に、どれだけ貢献して下さいましたか言葉では言い表せない程です。同時期、日暮先生も

月1〜2回の割合で館山まで足を運んで下さり、各種指導をして下さいました。一時期は、第一外科講師室で毎週月曜日午後6時から、奥井先生、日暮先生が300〜400名の間接撮影写真を、ダブルチェックで読影して下さいましたと聞いております。

又、奥井先生には、安房医師会の胃集検の成績を、日本消化器集検学会で、何年かにわたり発表して戴いたとの事です。窪田先生にも、昭和43年から45年まで第一外科の先生5名、技師1名を同伴で、日曜日1日80名の精検処理(直接X P)をお

願いました事が何度もあったそうです。そして、撮影された直接フィルム(約450枚)を現像処理し、その所見を記入し、翌日には届くという御苦労を強いたとの事です。

このような先生方の御尽力が、私共安房医師会の検診活動の基礎をつくって下さり、大きく飛躍でき、現在まで永続して運営されている要因に他なりません。そして、昭和46年に、対ガン協会賞を受賞しております。

時は移り、現在は、第一外科出身、富浦で開業している原久弥氏が、安房医師会の検診活動を、西川義明氏(昭34)本多満氏(昭37)と共にとりしきっております。

安房郡市住民検診会議は、原氏なくしては成立しない程であります。又、年1〜2回の胃集検関係の学会発表をこなしております。

又、第一外科出身では、平成11年7月1日安房医師会病院院長に就任した上村公平氏(昭50)が、昭和62年着任以来、胃間接撮影写真の読影、精検、発見胃がんの手術、術後フォローなど先輩達の築き上げた業績を積極的に引き継いでおります。

4. 胃集検の実績 昭和43年より平成10年迄の受診者延数は、449、657人、発見胃がん817名

(0.18%) 早期がん449名(59%) 進行がん314名、非手術58名、不詳1名。発見胃がん5年生生存率(自昭43至平5) 73.0%

発見胃がん10年生生存率(昭43〜昭63) 64.9% となっております。

千葉県がん登録事業報告書(第4報・平成5年11月発行)の中に、胃がん届出患者の集検由来率(昭和61年〜平成2年)が掲載してありました。市町村別に集

検で胃がんが発見された者の割合(集検由来率)が安房医師会管轄の安房郡市11市町村中9市町村の胃がん患者の20%以上が集団検診で発見されているという事でした。

千葉県内で、20%以上集団検診で胃がんが発見されている市町村は、安房郡市を除いて7市町村しかないとの事です。ですから4半世紀にわたる安房の検診事業の成果が極めて大きい事がこの事からも判って頂けるかと思ひます。

5. おわりに 今回の由緒ある対ガン協会賞の受賞は、ゐのはな同窓会の皆様の御指導、御尽力の賜であると、ここにあらためて深甚なる感謝を申し上げる次第でございます。有り難うございました。

卒寿を迎えられた中山恒明先生、

病める者への愛

千葉大学名誉教授 本間 三郎 (昭21)



千葉医科大学 教授

第二外科

昭和40年

東京女子医科大学 教授

消化器病センター 所長

昭和52年

国際食道疾患会議 創設

昭和57年

勲一等瑞宝賞受賞

平成11年9月26日に元第二外科教授であられた中山恒明先生の卒寿、90歳になられたお祝いが熱海のホテル大野屋で持たれた。万雷の拍手に迎えられた車椅子の先生も壇上へは歩いて昇られ、立ったままご挨拶をされた。そのキリッとした端正な容姿、会場をへい睨しつつ、明快な言語、軟弱さを微塵にも感じさせない力強い話振りは昔と少しもお変わりにならない。剛毅と呼ばれた古き日本男子の雄姿そのものでありましよう。

中山先生が千葉大学を去られてもう久しいので、最初に先生の略歴をご紹介します。

中山恒明

明治43年9月25日生まれ

昭和9年

千葉医科大学 卒業

昭和22年

短縮したこと、そのための手術中の緊迫感、そして予後の良好なることを囁んで含めるように説かれた。学生は悉く納得した。

第二外科のそう云った気

風は淡路島にも見ることができた。千葉駅から大学病院行きのバスのなかで、制服の学生が腰掛けていて、このバスのなかには患者さんが乗っています。学生は立ちなさい」と叱責された。学生はそんな婦長の気遣いに圧倒され、臨床実習にはいつも緊張し、患者には優しく対応し、心を入れて勉強した。

しかし患者を第一に考えよということだけでは大学教授は勤まらない。やさしく扱って貰う以上に患者が大学教授に期待していることは、世界に通用する最高の医療をしてくれることではなからうかと思う。戦後

の大学は正に虚脱状態にあった。医学医療は荒廃そのものであった。私は戦後一年目に大学を卒業し、生理学教室に入った。次第に入手できた外国の論文を見て、彼我との研究の差の余りに大きいのに唖然としてしまった。外国の研究レベルに到達できるものではない、ただ論文を読み、その内容を理解するのが精一杯であった。そんななかであって、中山先生は瀨尾教授以来手術を展覧させられ、手術を世界のレベルにまで高められていた。その成果を携え、

まだ渡航が制限されている時代に勇躍外国へと飛ばれた。自らの研究レベルを世界で確かめることが、当時の大学教授としてそれは最も大切なことなのだと感じたりしていた。その後再三再四にわたる外国からの招待に先生の研究レベルの如何に高かったか伺い知ることができた。その帰朝講演には欠かさず出席し、



例の力強いお話に魅了され、われわれは発奮した。第二外科には日本全国を問わず、世界から患者が殺到した。患者が大学教授に望んでいることが、何たるかをわれわれは実感した。私もそのような教授になろうと誓った。当時の惨めな研究から抜け出したいと思った。そして世界最高のレベルにある生理学研究所に留学し、世界のレベルを体得した。中山先生の感化を受け、研究への希望と勇気を与えられたわれわれ若者の奮闘が続いた。先生が千葉を去られた昭和40年に私は教授に就任した。われわれ若者は先生のご恩にお答えする時間の余裕のないままに先生は東京女子医大へと移られてしまった。千葉在職20有余年の先生のご業績は「大学教授その病める者への愛」で云い表されるのではないでしようか。

東京女子医大では消化器病センターを創設された。そこでの先生のご活躍は更に目覚ましいものであった。卒寿のお祝いの折、東京女子医大の吉岡理事長はその祝辞の中で「千葉大学もそうでありましようが、東京

卒寿のお祝いに参列された方々は中山先生のその輝かしいご業績を称えた。先生の日常は、こよなく愛されている真鶴の海をお宅から眺め、双眼鏡で、時折釣

古医書目録出版のお知らせ

「千葉大学附属図書館蔵古書コレクション目録(中間版)」が1月末に発行されます(全体の約半分を収録)。希望者は郵送料(切手340円、本体は無料)を添えて、るのはな同窓会事務局宛お申し込み下さい。

船を見ておられることとか、次回は白寿の会を迎えられるよう一同心から祈念した。

祝 叙 勲

平成11年秋叙勲

勲二等瑞宝章

萩原彌四郎(昭23)

勲三等旭日中綬章

窪田金次郎(昭23)

勲三等瑞宝章

横山 宏(専25)

祝 表彰

平成11年秋表彰

日本医師会優功賞

川村 純一(専25)

日本医師会優功賞

神田 敬(昭35)

日本医師会優功賞

藤森 宗徳(昭37)

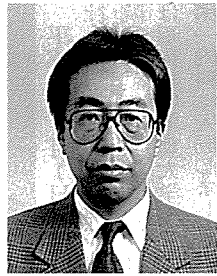
叙勲 褒賞その他祝事に關係された方は是非同窓会事務局まで一報下さい。編集部でも絶えず注意しておりますが、ニュースに接し得ない事態もあります。お喜びはなるべく早く、同窓の皆様にもお分けしたいと思っております。よろしくお願ひ申し上げます。

教授就任挨拶

病理学第二講座

石倉

浩 (北大昭55)



学生にとって病理がいかに重要であり面白い分野であるかをアピールする努力も重要です。

平成11年10月1日付で近藤洋一郎先生の後任として千葉大学医学部病理学第二講座の教授に就任致しました。全国レベルでの多数の著名な学者を輩出した伝統ある講座を担当するにあたりその責任の大きさを痛感しております。

これからの大学医学部における病理学講座の運営は非常に難しいものがあります。病理学講座は本邦における実質的な病理医養成機関の役割を務めなければならぬ一方、高度の研究水準をも要求されているからです。いまなお病理解剖の必要な臨床例が数多く存在し、地域の基幹医療の担い手としての病理認定医を輩出させることは近隣の医療水準の維持・上昇には不可欠です。医学部学生の基礎離れが全国的に言われる中

癌様分化を示す高度悪性癌腫)の研究も継続したく思っています。実験の分野では移植免疫学に加えて癌の浸潤・転移・治療の研究を主に腫瘍を材料として行ってきました。また若い研究者とともにIgA腎症の抗原検索なども行ってきました。これらの経験を生かし質の高い研究を目指して教室員とともに邁進したく思います。最後になりますが、ののとは同窓会の皆様のご指導・ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

臨床検査医学講座

野村文夫 (昭50)



が、同病院にたまたま、東大から月に一度こられていた中井先生の門を、はるか後、筑波で叩くことになることは、まさに巡り会いです。できれば早い時期に、外国の医学に接したいとの思いがつのついていた私は、CEMIGを取得し、恩師の奥田教授にご推薦頂き、ニューヨークのマウントサイナイ病院および関連のVAMedical Centerに約4年間留学し、Charles S. Liebert教授のもとでアルコール代謝とその臓器障害の研究に従事しました。

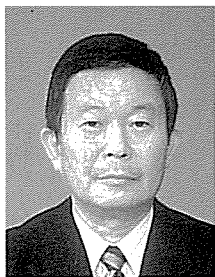
平成11年10月1日付で、臨床検査医学講座ならびに附属病院検査部を担当させていただくことになりました。検査部は昭和42年に創設され、初代検査部長故降矢震教授(昭22)、前任の米満博教授(群大昭35)について私が3代目です。平成5年に米満前教授のご尽力により講座化された臨床検査医学講座としては2代目になります。私は昭和50年に本学を卒業した後、第1内科(当時、奥田邦雄教授)に入局致しました。1年半の学内ローテートの後、野田のキッコーマン病院(当時福永和雄(昭和24)院長)に出張しました

大学医学専門学群において、千葉の同窓の先生方に公私ともに本当にお世話になりましたが、それぞれバツグクラウドが異なる集団の中で、いわば他流試合ができたことも収穫でした。さて、法人化、DRG-CDのなど不確定要素に囲まれ、検査部には厳しい昨今です。しかし、激動の時代に巡り会えたことをむしろ良しとし、高度先進医療を支える最先端の検査と採算性・経済効率という一見相反する両者を、教官と技官が一体となって追い求めたいと思います。

全国的にみて、検査部教官は内科の専門外来に従事している場合が多いようです。

病院長就任挨拶

国保旭中央病院 村上信乃 (昭39)



平成11年10月1日付で総合病院国保旭中央病院の院長を拝命しました。

私は千葉大を昭和39年に卒業、5年間当時の百瀬教授の教室で泌尿器科医としての訓練を受けた後、45年

ています。しかし辛いことには、前任者に残していたいただいた多大な人的、物的資産がありますので、それを活用して、職員一同の協力ののもとに、より充実した、より高度な医療をおこなう病院を目指して頑張りたいと考えております。

さてこれを機会に少々当院の紹介をさせていただきます。当院は地域住民が自らの健康を自らの手で守り、国の皆保険制度実現に協力するため、旭町ほか8ヶ町村(現旭市ほか3町)が、昭和28年3月1日に諸橋先生を病院長として発足させた自治体病院(県立病院や市立病院と同じ)の一つです。開院当時は病床数113床(うち結核病床78床)、職員45名、建物面積273㎡の千葉県の片田舎の小さな病院でしたが、病院長の卓越した経営能力により、病床数96床、常勤職員180名、建物面積121・453㎡の今日の姿へと発展しました。

当院の特徴をいくつか挙げますと、(1)厚生省臨床研修指定病院を含めて内科学会、外科学会などほとんどの学会の研修施設認定を受けている教育病院であること。(2)県知事指定の高度医療を提供する特定承認保険医療機関であること。(3)剖

検率が高いこと(平成10年度、418体、55%)。このことは臨床と病理の照合、結びつきを重視するとともに、職員と患者および家族とのよい関係を重視することの証明にもなります(死の直前までよく患者さんを診て、家族の信頼を得ておこなければ解剖の承諾は得られませんが)。(4)現在当院に在籍する166名の常勤医師の出身大学は、千葉大35名、東大20名、東京医科歯科大19名、群馬大10名など45の大学に広がっており学閥がないこと。(5)全医師が病院の敷地

内又は近接地に居住しているので、24時間、1次より3次までのいかなる救急患者(平成10年度45、017名)に対応できること。また入院患者の急変にも、主治医が即座に直接対応できること。(6)老人保健施設、養護、特別養護老人ホーム、ケアハウスなどを併設して、医療と福祉の連携を重視しているとともに、今後の介護保険への対応も可能であること。(7)駐車場が瀕台分と敷地面積(148、071㎡)が広いので、将来の拡張の余地が十分あること。

(8)大部屋の病室でも、全て1床あたり8㎡以上床面積があり、アメニティのよいこと。などがあります。これらの特徴は、諸橋名誉院長が「病院は(すべて患者のため)にあり、医師を自分の職業として選んだからには、最新、最善の医療をおこなうために、絶えず勉強をするともに、24時間患者のために尽くすのは当然である」という理念を掲げ、その具現を真摯に追求された結果出来上がったものと考えます。医師が病院近接地に居住して、い

かなる時間でも、その急変にも対応する患者中心の姿勢を貫いているので、他の職種の職員も自然と同一化して、時には勤務時間を度外視しても患者のために尽くすことが当たり前という今日の病院の姿になったのです。しかし諸橋先生ご自身も「当院はまだ目標の75%しか完成していない」と常々言われておりました如く、不備な点が多々ありますので、更なる完成を目指して、これからも努力する所存です。同窓会の皆様の温かいご支援をお願いいたします。

社会保険船橋中央病院



平成11年4月1日付けで社会保険船橋中央病院の病院長に就任致しました。私は昭和40年千葉大学卒業後、第一内科に入局しましたが、昭和47年東京女子医科大学消化器病センターに転出し、肝臓病の勉強をさせて頂きました。この度、藤本茂前院長、税所宏光第一内科教授、谷修一全社連副理事長の御推薦を得ましたことを

久満 董樹(昭40)

転機に、27年間勤めた職場を辞して身に余る大役を引き受けすることになりました。

経済不況に各界が苦しんでいる今、公設民営という特殊な形態をとる社会保険病院もその例外ではありません。社会が求める医療の質を保ちつつ合理化を促進することは至難の技です。私は次の三点を病院の理念として掲げ、職員の一人ひとりが経営者になったつもりで職務を遂行してもらおうと思っています。

第一に「職能と倫理の追求」です。各部署が専門職としての知識や技術を磨き、高いプロ意識と医療者としての倫理観を追求することが大切です。第二に「良質な医療の提供」。大学で得た技術を惜しみ無く発揮してさらに研鑽を続けること。高額機器を用いるばかりが高度医療ではありません。地域医療としての適正さが必要でしょう。第三に「誠心誠意の接遇を挙げます。各部署が患者に懇切丁寧に接すること。療養担当規則そのままでのありながら日頃忘れがちなことです。十分な説明と誠意があればカルテ開示問題など無用の心配です。当院は幸い千葉大学出身者が多く、大学各医局のご

協力を得て優秀な医師が確保されています。しかし、その反面、新鮮な活力を欠いているように見受けられます。半公務員の空気に慣れ過ぎているのでしょうか。病院の運営はやはり医師が主体であるべきで、医師が積極性を失ったり変化を嫌ったりでは困ります。医師団の自由な発言提議を望みます。研究生活とは異なった場面にもっと生き甲斐を見い出して欲しいと思います。将来、臨床研修指定病院を名乗ることは目的ではなく、個々の医師のレベル向上、魅力的な病院運営組織の達成、それぞれの結果であるべきと考えています。

教

室

だ

よ

り

解剖学第二講座(形態形成学)

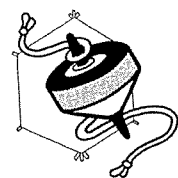
本講座に湯浅が教授として赴任して三年半が経過した。まだ、体制が十分に確立したとはいえないが、教育、研究の両面で一応軌道に乗ったと考えている。以下に当講座の教育、研究の現状を報告したい。

教育に関しては医学部2年生の組織学の講義と実習を担当している。また、4年生の基礎配属では熱心な学生が集まって教室の活性化にも役立っている。これとともに、普通教育科目の生命科学、薬学部の解剖学講義を受け持っている。医学部新入生のために高校生物と基礎医学総論の橋渡しをする目的で来年度から始まる基礎医学生命科学では組織学総論部分の講義と実習を1年生後半からスタートし、基礎学力の補充と医学を学ぶ動機づけに活かしたいと考えている。

研究に関しては、とりあえず与えられた環境、条件の中で成果をあげることを第一の目標としている。神経科学の領域では、湯浅がこれまで十数年おこなってきた中枢神経系の発生・再

生におけるニューロングリア間の相互作用のメカニズムの問題を継続して追求している。これとともに、千葉大学に着任してからは、高次脳機能のうち未開の領域である情動の神経機構について研究を開始した。扁桃体の発生、構築、分子ならびに行動レベルでの機能解析を含めて成果が出始めており、この研究の立ち上げには精神科から派遣していただいた大学院生の服部君、久保田君の貢献が多々である。

一方、脳の発生にかかわる分子の多くが精巣にも強く発現することに注目し、前任教授のスタッフの中にも協力者を得て、精子形成の分子機構の研究も行っている。生殖細胞-セルトリ細胞間相互作用におけるチロシンキナーゼの役割(前川眞見子助手、今年度猪之鼻奨学会研究補助金受領)、精子形成における免疫グロブリンスーパーファミリーの役割(外山芳郎講師)に関して研究を進めている。解剖学の講座のありかたは今後大きな問題となると



教授 湯浅茂樹

思われる。教育に関しては、大学院重点化、独立行政法人化等、システムの改革がすすむなかで教育形態がかわることは避けられないが、現行の教育内容は医学部学生基礎学力として必須の内容であることに変わりはない。この教育水準を維持することに千葉大学医学部は責任をもってゆくべきであると考えている。一方、研究に関しては、先端的、学際的な領域を開拓し、高い水準をめざして自己変革に努めることは解剖学においても当然で、解剖学という講座名自体が学問の状況に適合しなくなっている可能性もある。しかし、これは形態学が重要でないという意味ではなく、むしろ分子細胞生物学的研究の領域でも形態学的解析はますます重要となっている。現に当講座は本大学院医学研究科高次機能系の多くの講座とも共同研究をおこなっており、高い形態学的研究能力の維持は本学部の研究水準にも重要であると考えている。

解剖学第三講座 (神経生物学)

初代鈴木重武教授、第2代大谷克巳教授の後を次いで、私が昭和63(1988)年から第3代目を担当しております。学部教育では、神経解剖学と骨学を担当しています。中枢神経系の解剖は、3次元構造が複雑で名称も多岐に渡るため、実物を見ることすなわち実習を重視して理解を深めてもらうように努力しています。実習講義として、神経内科と脳外科の先生方の御協力を得てその日の実習内容に関連する臨床の話題を紹介してもらい、学生のみならずスタッフも新しい臨床技術の進歩を学んでおります。大谷教授が作成された人脳の完全連続切片標本は大変貴重なもので、毎年実習で学生に観察してもらっています。また、自然科学の世界では英語が国際語となっているため、英語で論文を読み、書く必要のあることから、わずかの時間ですがセミナーで医学英語の勉強も行っています。骨学でも実物を手に触れて観察しスケッチを描いて学ぶことを中心にしています。本学には現代人骨の極めて質のよい貴重なコレクションがあり、しばしば学外から

研究者が訪れて研究に利用し感謝されています。これは、三橋公平教授を中心に収集されたものです。また、実習室には献体された御夫婦の貴重な骨格標本があります。その他、4年生が基礎配属で約1ヶ月間教室に来て研究の体験学習を行っています。普遍教育すなわち全学の学生を対象とする一般教養のカリキュラムでは文系の学生を対象に「脳のはたらき」と題して生理学講座と共同で授業科目を、総合講義の中で「医の倫理」を、医学部1年生には分子細胞生物学で「シナプスによる情報伝達」の講義をそれぞれ担当したりと教育の分担も変化し大変忙しくなってきました。

大学院医学研究科では、高次機能系神経生物学という講座名で広く神経科学領域の研究を行うことを目指しています。大学院生の多くは臨床で提起された問題の解決を目指して形態学的な研究のために派遣され約2-3年で研究成果をまとめて臨床に戻っています。大学院生には課題に取り組んで研究を行うと同時に、国際学会に発表して成果の評価を受けるとともに、関

連する研究領域の世界のレベルを体験学習することも勧めています。基礎医学に興味を覚えて転向する大学院生がたまには生まれて欲しいと期待しております。

2000年度から医学部4年修了後大学院進学が可能となりました。頭の柔らかい内に研究を始め独創的な成果を挙げる人々が生まれることを望みたいと思います。

研究には、免疫組織化学、*in situ hybridization*、蛍光顕微鏡、電子顕微鏡などの形態学的手法のみならず抗体作成や生化学的技術も駆使して研究を進めています。教室の研究テーマは、

(1)中枢自律神経系とくに日本ザルの前頭前野の投射と入力部位の検索、(2)前頭前野と視床下部へ二重投射する扁桃核後核神経、(3)条件づけ恐怖ストレス負荷に対する脳内反応の *immediate early gene* 発現による検出

の機能形態学的変化および痛覚ブロックや再生促進への磁場作用、(5)三叉神経と翼口蓋神経節を介する神経節反射における *substance P* と神経と受容体の関与、(6)腹腔に分布する知覚神経の由来と伝達物質および終末の形態、(7)神経細胞死(アポトーシス)誘導に関与す

生化学第一講座 (分子代謝学)

2000年にあたり歴史を緋くと、前身の医化学教室が創設されたのは大正元年(1912年)9月であり、87年が経過したことになります。この間、柏戸留吉、末吉雄治、赤松茂、三浦義彰、藤村眞示の歴代教授が教室を主宰されました。

三浦先生は最近、千葉医学雑誌に「20世紀のわが同時代人」と題して御親交の深かった生化学界の内外の方々の随想を連載されております。先生のお言葉を借りるならフランス語半過去形の同時代史であり、今日につながる歴史が脈々と感じられるとともに、医学部学生のころ先生に伺った講義が彷彿とされます。

藤村先生は昨年(1999年)3月に退官され、名誉教授となられました。2月2日に行われた最終講義は「はじまりのはじめ」と題され、実験胃がんを確立され、さらにポリADPリボースを

教授 千葉胤道

の健康への寄与を目標にその基礎としての形態と機能に関連づけた教育と研究を行ってゆきたいと考えています。会員の皆様の基礎医学への御理解と御支援をお願い致します。

佐はがん関連遺伝子の網羅的機能解析、薬剤感受性と遺伝子機能の関連解析を主な研究テーマとしております。いずれも将来の臨床応用を夢に、また常に臨床的視野からの意義付けが重要なテーマです。また、多くの基礎部門とも連携させていたきたい分野です。亥鼻キャンパスにお越しの折

微生物学第一講座 (分子遺伝学)



当講座は、大正14年に衛生学教室より分かれた細菌学講座に始まり、桑田次男名誉教授が教室を主宰されました。現在、滝口はオルニチンサイクルを中心とする代謝、および神経可塑性の遺伝子発現レベルでの制御機構、転写調節因子を標的としたがん治療を、日和

教授 滝口正樹

り是非お立ち寄りになり、お話をお聞かせ頂ければ幸いです。研究室の模様替えなどをしておりますと、大正や昭和初期の調度類や実験機器も散見され、懐かしくご覧頂けるかと存じます。ゐのはな同窓会の皆様方の一層の御声援を心からお願い申し上げます。

も続くものと思われ、医学の中では比較的若い学問であると言えます。従って、最新のウイルス学の知識を医学部学生に与えても、彼らが臨床で活躍したり、研究をする頃には、教えた内容の概念の一部が変わってしまっていたり、新しいウイルスが発見されていたりすることも珍しくありません。こういった事情から、やみくもに最新の知識だけを教えるのではなく、医師、医学研究者となった時に十分応用が効くようにウイルス学の基本を軸にして教えると共に、いたずらに個々のウイルスを網羅して教えるのではなく、最新のトピックスに焦点を当てて、ウイルス学の基本的知識に基づいてどのように考察すべきかを教育することに力を注いでおります。

一方で、細菌学講座から微生物学第一講座に変遷する間、中心となる研究テーマもリケッチア、ファージ、日本脳炎ウイルス、インフルエンザ、RNA腫瘍ウイルス、パピローマウイルスと時代に対応しながら変化してきました。この研究テーマの流れを見てお分かりのように、常に微生物学の中のフロンティア領域での研究に取り組んできたという歴史があります。現在、大学院専攻科目は分子遺伝学を担当しており、先代の清水文七名誉教授時代の教室のテーマであったDNA腫瘍ウイルス学をメインテーマとして研究を行っております。腫瘍ウイルス研究は、宿主細胞の機能研究と深い繋がりがあり、当教室で行っている研究内容は、細胞シグナル伝達系、アポトーシス、細胞分化に関するものであることから、小兒外科学教室、第二外科教室、第一内科教室、精神医学教室、歯科口腔外科学教室、耳鼻咽喉科学教室、呼吸器内科学教室等の臨床医学教室と共同で癌研究および分子生物学的研究も精力的に行っております。現在、多くの臨床医学教室の支援を受けて、活気ある若い大学院生で溢れています。今後、臨床医学に即したウイルス学に貢献すべく、自由な雰囲気のある教室作りに努めて行きたいと考えております。同窓会の更なるご支援を賜ることができれば幸いです。

(写真：秋のレクリエーション、幕張マンハッタンでの昼食会後の集合写真)

教授 白澤 浩

微生物学第二講座 (病原分子学)

微生物学第二講座は、現代微生物学が細菌学とウイルス学とに細分化されてきたのに伴い、昭和56年4月に細菌学の講座として新設されました。

昭和57年3月、初代教授に小林章男先生が就任されましたが、惜しくも就任後2ヶ月足らずで急逝されました。昭和58年3月、2代目教授として東京大学医科学研究所細菌感染研究部教授の加藤巖先生が着任されて実質的に微生物学第二講座を開講され、現在の基盤を築かれました。加藤教授は、文部省の特定研究「生物トキシンの基礎的研究とその医学生物学への応用」の研究代表として全国のトキシシン研究者を統合し、相互連携の下に研究推進を図り現在のトキシシン研究を世界的レベルに上げる原動力となられました。なお、トキシシンとは微生物を始めとする生物由来の毒性物質の呼び名で「毒素」のことです。ヒ素や青酸カリなどの「毒物」とは区別されています。病原細菌由来のトキシシンは主として蛋白質から出来ているユニークな立体構造をもったものが多くあります。



教授 野田公俊

寄生虫学講座 (感染機構学)



昭和31年に横川宗雄初代教授によって開講された本学寄生虫学講座は大きな転換期に入った。教室の歴史は大きく3つに区別できる。

昭和31年に横川宗雄初代教授によって開講された本学寄生虫学講座は大きな転換期に入った。教室の歴史は大きく3つに区別できる。古典的寄生虫学の時期(約35年間)、7年間の教授不在期を経て、平成9年に着任した矢野(教授)、青才(助教授)、野呂瀬(助手)、畑(助手)、小林(助手、在ブラジル)他非常勤職員(星野、柴田、日本(塩野)と韓国(文惠聖、中国(陳梅)、エジプト(Usama Salah Belal, Rabie Mohammad Ibrahim)・レーニア(Aza Nor Ahmad)出身の大学院生・研究生6名と臨床から大学院生3名による陣容で船出した国際社会

化、大学院重点化、高度先端医療の確立、国立大学の独立行政法人化の疾風怒涛期である。平成10年には第9回国際寄生虫学会(大会長は本教室同門会長辻守康杏林大学教授、事務局長小島莊明前教授現東京大学医科学研究所教授、会場設置副部長矢野明彦)が千葉幕張メッセで天皇皇后陛下をお迎えし、世界各国から100名を超す研究者の参加を得て盛大に開催された。また引き続き幕張プリンスホテルで第4回日韓寄生虫セミナーを矢野明彦が大会長を務め、磯野学長、ベビハニ世界保健機構熱帯病対策局長、世界寄生虫学者連盟会長鈴木守群大教授を始め100名を超す参加者を得て開催され、アジア寄生虫学者連盟設立構想を提唱・承認され、現在文部省や学術振興会などの援助を得ながら実現への歩を進めている。

医学部教育では医寄生虫学と生体防御学、熱帯国際

感染医学を教えている。大学院研究活動では、細胞内寄生虫であるトキソプラズマをモデルにして細胞内寄生体に対する生体防御機構の解析、抗原提示細胞を標的にした遺伝子ワクチンの開発、および寄生虫病研究を介した国際交流・貢献を行っている。寄生虫の診断・治療の相談にのっており、トキソプラズマ症、ヒト肺糸状虫症、肺吸虫症などでは全国のセンター的役割を担っている(ホームページ: http://www.m.chiba-u.ac.jp/class/infection_and_defense)。

ところで、昭和40年代の日本の回虫感染率は70%であったが経済の発展と共に日本の寄生虫症は激減し、最近是有機栽培野菜を嗜好する人しか感染できない感染症になった。ところが、一度は撲滅したかに思えた寄生虫が復活してきた。世界保健機構の発表によれば今でも年間150万人以上の人々がマラリアで死んでいるという。ところが世界を旅する人数が年間200万になる今日の日本ではそれを実感できる人は極めて稀である。それはどうしてなのであるうか。寄生虫症発病率と国・地域の経済の発展度は逆相関することが知られている。

日本に最も近い外国で最近旅行人気が高まっている隣りの韓国では、マラリアの発生を隔年には年間僅か1名までに押さえ込んだが、昨今のアジアの不景気の例にもれずIMF管理の状況下で、昨年(1999年)は400名を超す三日熱マラリア患者がでている。世界唯一の超大国アメリカによる経済を基にした世界戦略は日本、韓国、中国のみならず寄生虫流行地域をも巻き込んでボラレスワールドを拡大しており、それに伴い従来は地方病とも呼ばれた寄生虫病も飛行機で1日そこらで世界を1周することになった。日本の空の表玄関成田空港の地元である我が寄生虫学教室もその枠の外ではない。矢野が教授に赴任して以来、寄生虫症による死亡例、瀕死・重症例として、赤痢アメーバ症、糞線虫症、マラリア、クリプトスポリジウム症、トキソプラズマ症、日本住血吸虫症、鉤虫症などがあつた。また、高度先端医療の対象患者にマラリア、赤痢アメーバ症、シャーガス病の既往患者があつた。さまざまな開発・環境破壊が人間にしばしば返していることは、ナイル川アスワンハイダム開発に伴う住血吸虫症やマラリアの拡大や、熱

帯雨林の伐採に伴うマラリア患者の激増などから、我々は十分に経験している。さまざまな領域・分野で、科学と人間社会と地球環境のあるべき相互・総合価値体系の確立が求められている。教育現場においても「競争原理の導入」の号令の基に社会に富を求め、価値基準の均一化と研究の先鋭化が進められている。医学の対象が病氣、そして病人だ人や環境であるならば、人や病や社会を全人的総合的に

内科学第一講座

(病態生理学)

教授 矢野明彦

私共の教室は、千葉大学医学部の前身である千葉医科大学の発足に伴い大正12年に開かれた学内で最も古い教室の一つです。初代竹村教授、第2代石川教授は教室の基礎を築かれ、第3代三輪教授は消化器病を含め幅広い分野にわたり教室を指導されました。第4代奥田教授は教室の国際的評価を高められ、第5代大藤教授は特に画像診断を駆使して肝胆膵の分野で多くの業績を上げられました。平成7年夏から第6代教授として税所が教室を運営しています。

当科は消化器、腎・免疫、血液疾患を中心に診療・研究・教育を行っております。

みれる医学教育・研究が求められ、医育者自らも多様な観点を失わないように確かなビジョンを確立してその実行のために今ほど強靱な忍耐と努力が要求されている時はないであろう。その意味で寄生虫学教室の存亡は千葉大学医学部アカデミズムの極めて価値あるバロメーターであらうし、ありたいと思う。ゐのはな同窓会の先生方のご指導、ご支援をお願いする次第です。

内視鏡や血管造影下のカテーテル法を用いて診断と治療を行い、カラードプラー法による血行動態診断も行っていきます。

膵臓・胆道系疾患では、従来の画像診断を中心に経口膵管鏡、経口胆道鏡や腔内超音波を用いた膵癌、胆管癌の早期診断、進展度診断に力を入れています。進行膵癌の治療は適正な抗癌剤による化学療法と放射線療法を組み合わせた集学的治療を行っています。膵石症、肝内結石症、総胆管結石症に対しては体外衝撃波破碎療法と内視鏡的治療とを適宜組み合わせ排石を行い、慢性膵炎の主膵管狭窄に伴う疼痛に対しては内視鏡的ステント留置術を行っています。胆嚢胆石症は体外衝撃波破碎療法、経口胆汁酸溶解療法といった胆嚢温存療法を行い、多数症例の経過観察をしています。

上部、下部消化管内視鏡検査は年間約100例を数え、日常診療に必須のものとなっています。大腸ポリープは内視鏡的粘膜切除を積極的に行っております。

胃腸症状に伴う器質的病変を認めない患者さんには、胃排空能検査、大腸内圧測定など種々の検査により消化管運動機能を調べ、

病態に応じた治療を行っています。

腎臓疾患は、原発性糸球体腎炎や膠原病、糖尿病、高血圧などに基づく二次性腎疾患を担当し、腎不全患者については人工腎臓部と協力して診療にあたっています。

血液疾患では造血腫瘍が中心であり、治癒を目的とした強力な治療を行い必要に応じて同種または自家、骨髓または末梢血の造血幹細胞移植を施行しています。

また、他の診療科と協力し造血器腫瘍以外の固形腫瘍を対象とした末梢血幹細胞移植も試行中です。

水曜日には非常勤講師の松下先生が漢方外来を、金曜日の午後には臨床検査部の菅野治重講師がHIVを含めた感染症専門外来を開いています。

内科学第二講座

(細胞治療学)

教授 税所宏光

千葉大学医学部内科学第二講座(第二内科)の歴史は医学部の前身である千葉第一高等学校医学部時代の明治31年(1898)に井上善次郎教授が就任したときに始まり、平成7年5月より齋藤康が第10代教授として教室を主宰しています。昨年1998年にはじめてたく開講100周年をむかえ、磯野学長、谷口医学部長、山浦病院長、熊谷朗元第二内科教授、吉田尚前第二内科教授に御列席いただき、幕張メッセで「千葉大学医学部内科学第二講座開講100周年記念式典」を執り行いました。式典終了後、多田富雄先生(前東京理科大学生命科学研究所長)、黒川清先生(東海大

ます。関連病院との適切な人事交流をはかりながら、医師の資質向上とともに臨床研究の内容の充実に益々努力したいと思っております。海外留学生の受け入れ、海外への留学生の派遣も常時数名ずつ行い、またJICAの国際技術支援チームに参画するなど、国際交流にも地道な活動を展開しております。

消化器病を中心に腎、血液分野を併せ持つ教室として、腫瘍と感染症に関わる

総合的内科学講座を目指して頑張っております。今後とも諸先生方の御支援と御協力をお願いする次第です。なお、新患外来は紹介患者さんを中心に、土、日、祝日を除いて毎日開いております。ご用の折には、遠慮なく詳細を当科の外来か医局にお問い合わせいただければ幸いです。

(電話) 外来受付 043-226-1225、医局 043-226-12083

国に先駆けて第二内科内に「卒後研修委員会」をもうけ、「*Postgraduate physician*」(一般臨床内科医)たれ」を目標に研修医教育にあたり、研修医並びに指導医より定期的に卒後研修記録の提出をいただきシステムの評価・改善に努めております。

臨床面では幅広い専門領域を持ち、(1)免疫・アレルギー(岩本助教を中心に)、喘息などのアレルギー疾患・リウマチやSLEなどの膠原病(月、火、木、金)、(2)内分泌(龍野講師を中心に)、視床下部、下垂体、甲状腺(甲状腺癌、バセドウ病、慢性甲状腺炎)、副腎、性腺機能、骨カルシウム代謝、2次性高血圧など(火、水、木、金)、(3)糖尿病(橋本講師を中心に)、糖尿病の診断・治療(火、水、金)、(4)脂質代謝(武城助手を中心に)、肥満症、高脂血症、家族性高コレステロール血症、動脈硬化症など(水)、(5)老年医学(森助手を中心に)、(6)早老症候群(ウェルナー症候群)など、(6)血液疾患(西村助手を中心に)、白血球、悪性リンパ腫、各種貧血症、骨髄移植など(火、水、木)、(7)消化器疾患(鈴木康夫助手を中心に)、炎症性腸疾患(潰瘍性大腸

炎、クローン病)、消化器悪性疾患(食道がん、胃癌、大腸がん)、内視鏡的治療など(月、火、木)を大病院で行っております。是非、問題のございます症例は気軽にお問い合わせいただき、御紹介賜りますようお願い申し上げます。

研究面におきましても免疫アレルギー・内分泌・脂質代謝・動脈硬化・糖尿病・老年医学・造血腫瘍・骨髄移植・炎症性腸疾患の各分野において、最新の分子生物学を取り入れ遺伝子治療も視野に日夜研究を行っており、多くの医局員をアメリカはもとよりヨーロッパにも留学させております。

最後に、今後とも第二内科は内科学診療の進歩に貢献してゆく所存で、医学部同門の先生方の御支援は必須のものと受け止めておりますので、御意見・御希望などございましたらお気軽に、齋藤が医局長の龍野までお寄せいただければ大変幸いです。

教授 齋藤 康



内科学第三講座 (循環病態学)

当教室は昭和49年12月16日に開設され、初代教授として当時内科学第二講座助教授であった稲垣義明先生が就任された。当初の教室員は約40名であったが、その後順調に入局者が増え、現在同門会会員は約300名、関連病院は約30の教室に成長している。当科の専門科目は循環器学であるが、平成2年に附属病院に冠動脈疾患治療部が開設されたのを受け、互いに協力し、循環器疾患の内科的治療に当たっている。

稲垣先生は我が国の循環器学の権威であり、日本内科学会理事、日本循環器学会理事、日本脈管学会会長として活躍された。とくに、卒後教育の問題に力を入れ、我が国における内科学および循環器学専門医制度の発展に尽力された。また、教室からは木下安弘先生(千葉大学保健センター前センター長)、小川道一先生(電気通信大学保健センター前センター長)、道場信孝先生(帝京大学医学部市原病院院長)、坂口明先生(電気通信大学保健センター長)等多くの人材が輩出している。平成5年稲垣先生の退官後は増田善昭が教授に就任し、教室の伝統を受け継いでいる。

当科の診療面での特徴は、診断と直結した治療であり、心電図、胸部X線、超音波、核医学、CT、MRI、DSA、PET等の患者に苦痛を与えない非観血的診断の質の高さは全国有数と自負している。また、近年の冠動脈疾患の増加につれ、心臓カテーテル、冠動脈造影が年々増えており、PICAやアブレーションなどのインターベンション治療が昼夜可能になるよう努力している。

分子生物学的研究にも及び、国内外で活躍をしている。また、毎年数名の教室員が欧米諸国に留学している一方、中国等より留学生の受け入れを行っており、国際間の研究態勢を調えている。初代教授の稲垣先生は残念ながら平成8年6月にお亡くなりになったが、全体

泌尿器科学講座 (後腹膜臓器機能学)

の和と個の自由を尊ぶ教えは残されている。本教室は開設25年とまだ若い教室であり、これまで同窓会の皆様方より多くの御指導、御助力を賜わってきたことに厚くお礼申し上げます。今後とも変わらない御支援をお願いする次第である。

教授 増田善昭



師赤倉功一郎・市川智彦(山西友典は英国留学で休職中)、助手は6名です。この他、大学院22名、医員5名、研修医4名、教務職員1名、臨床検査技師2名、秘書2名であります。なお、留学中のものが3名います。

泌尿器科学教室は100年に皮膚泌尿器科より分離独立しました。百瀬剛一、島崎淳に次いで現在は伊藤晴夫が教室を主宰しています。現在の教室員は教授伊藤晴夫、助教授五十嵐辰男、講

研究の柱はかなり前より泌尿器癌、アンドロロジ、神経因性膀胱、尿路結石の4つになっていました。前立腺癌に関しては遺伝子変異、アンドロゲンレセプター異常、転移抑制遺伝子、新

しいホルモン療法、前立腺全摘除術式の開発などの研究を行ない、画期的な成果をあげております。転移抑制遺伝子BCL-2の発見は特筆に値すると思います。この他の泌尿器癌では腎癌、膀胱癌、精巣腫瘍の主に臨床的な研究に取り組んでおります。教室の伝統であるアンドロロジの分野では伊藤が日本アンドロロジ学会の理事長、日本不妊学会の副理事長として学会の指導的立場にたっており、第二解剖学教室および分化制御学教室との連携の下に精子形成の分子生物学的および内分泌学的研究、無精子症の遺伝子解析、精子機能の研究を行なっています。さらには本学第二内科学教室のご協力を得て副腎疾患に対する内視鏡手術法の開発を行っており、本邦における副腎手術の約1割の手術を施行しています。神経因性膀胱に関する研究は主に電気生理学的に行なっています。本学神経内科学教室のご協力により各種神経疾患における排尿異常に関しては膨大なデータを有しています。尿路結石に関しては本学第二微生物学教室のご協力を得て、ヒト腸管中よりシュウ酸を分解する新しい菌を3種発

見しました。また、カルシウム結石の再発を予防する新しい食事療法を提唱しています。最近ではtype1システン尿症の新しい遺伝子変異を5つ見出ししています。さらに、杏林大学薬理学教室との共同でnon-type1システン尿症の原因遺伝子(BATI)の同定に成功しました。このように、臨床より提示された問題を基礎的に掘り下げ、その成果を臨床に還元できるような研究を行なうように心掛けています。現在、高度先進医療に申請中のものに「前立腺癌のDNA診断」と「焦点式高エネルギー超音波治療法(HIFU)」があります。

2000年5月24・27日に幕張メッセにて開催予定の第3回アジア・オセアニア・アンドロロジー学会、および2000年5月24日に同所にて開催予定の日本アンドロロジー学会の準備中でありました。また、2000年7月7日に腎泌尿器疾患予防医学研究会のお世話をさせて頂く予定です。なお、本年10月5日よりバングラデッシュから文部省の国費留学生が尿路結石の分子生物学的研究のために1年半の予定で教室にて研究中であります。

現在までに多くの教室出身者が他大学の教授として活躍しております。片山喬は2000年6月に富山医科薬科大学の副学長兼病院院長に就任し、後任として2000年4月には布施秀樹が富山医科薬科大学泌尿器科教授に昇任しました。その他、山形大学泌尿器科教授中田瑛浩、独協医科大学越谷病院泌尿器科教授安田耕作、帝京大学市原病院泌尿器科科長正井基之が活躍しております。

教授 伊藤晴夫

産婦人科学講座

(生殖機能学)

教室の歴史は100余年を数え、現在教室員は25名であります。最近では更に先端生殖医療の発展に伴い、embryologyという別の顔も合わせ持たなくてはなりません。

産婦人科医は、婦人科、産科、新生児科と本来各々独立した分野が一人の医師

の中に同居せねばならないという宿命を背負っています。最近では更に先端生殖医療の発展に伴い、embryologyという別の顔も合わせ持たなくてはなりません。一昔前だったならば、胎児の時から死を迎えるまでが産婦人科医の仕事であったのに、近年は、一個の精子

卵子の時から死を迎えるまで、が産婦人科医の仕事になってきたといえましょう。

そうはいっても一人の人間の中でこれだけの専門性をすべて包括するのは不可能であり、能率的ではありません。そこで現在、臨床研究共に婦人科腫瘍、不妊生殖内分泌、周産期新生児の3つにグループ分けし、各スペシャリストにより診療にあたっています。

婦人科腫瘍においては、放医研との共同で進行子宮がんに対する重粒子線治療を行っています。子宮頸癌初期病変に対しては、Hb<感染と子宮頸部発癌に関するコホート研究(文部省重点総合がん班研究)に参加し、積極的保存療法を行っています。

不妊では外来における人工授精、更に難治性不妊症に対しては入院にての体外受精をメインとして凍結胚保存、融解胚移植まで行っています。

皮膚科学講座

(基質代謝学)

当教室は明治42年(1909)に診療科として外科から分離・開設してから、お陰様で今年で90周年を迎えることができました。この間、昭和35年(1960)に皮膚泌尿器科教室から泌尿器科教室

周産期では羊水穿刺、出生前診断、出生前遺伝子診断、胎児とplacentaの評価、合併症妊娠の管理等です。遺伝子診断では血友病、筋緊張性ジストロフィー、骨形成不全症等を扱っています。

医師ばかりでなく、助産婦にもevidence based careを目指してもらうために、月2回助産婦と合同で個々の分娩症例のカンファレンスを行っています。時には、口角泡を飛ばしながらの激論に発展することもあります。彼らと我々が目指すend pointは同じであり、こうした地道なdiscussionによって助産婦にも産科学を啓蒙しております。

最後になりましたが産科は特に他科との緊密な連携を必要と致します。小児科、麻酔科、小児外科はじめ多くの他科の先生方に平素よりお世話になっておりますので、この紙面を御借りして厚く御礼申し上げます。

助手 伊藤 桂

外来診療業務では県内の同門会の先生方をはじめとして多くの診療機関から患者を紹介頂いて多数の疾患を経験させていただいております。一方、入院診療業務では悪性黒色腫や悪性リンパ腫等の皮膚悪性腫瘍が病床数の過半数を占めており、多くの科の御協力を得て診療を行っており、深く感謝しております。また、皮膚悪性腫瘍以外では、水痘性疾患等の皮疹範囲が全身にわたる患者が多く、多忙な業務にもかかわらず看護部の御支援ならびに御配慮を頂いて包帯交換などの業務を行っております。

医学部学生の教育につきましては、学生諸君に教科書に記載された知識の修得に留まらず、最近の知見をできる限り紹介することに、学問としての皮膚科学にも関心を持ってもらいたいと考え、講義をしております。一方、実習におきましては、皮膚科診療の基本であり、かつ将来いづれの科を専攻しても必須であるべき皮膚現症の記載を修得させることに重点をおいております。

皮膚科医師の卒後臨床研修においては、論理的思考能力と、主体性を有する皮膚科専門医の育成を目標として、マニユアル化された診療技術の修得に留まることなく、先進の姿勢を重視しております。

研究では基質代謝学を主要課題としており、疾患としては強皮症やエーラスダシロス症候群等を対象としております。また、入院患

整形外科科学講座

(運動機能学)

者が多く予後の悪い悪性黒色腫に対しては高次研の御協力を得て新しい免疫療法の開発を行っております。

教授 新海 宏

整形外科科学教室は、昭和29年6月、故鈴木次郎教授の就任により開講されました。鈴木先生は脊髄外科を中心に確固たる教室の基礎を創られ、医学部附属病院長や医学部長を歴任されましたが、昭和43年1月11日に急逝されました。

後任として就任された井上駿一教授は、鈴木先生の築かれた基礎の上に、整形外科科学教室を更に大きく発展させました。中でも、脊椎外科領域における数々の業績は、国内のみならず海外においても高い評価を受けるに至りました。ところが、井上先生は、昭和62年9月に不慮の人となられてしまいました。

私は、井上先生の後任として昭和63年5月、整形外科の教授を拝命致しました。現在、同門は40名余りを数え、教育研修が可能な関連病院も50数病院にのぼっております。

教授 守屋秀繁

眼科学講座 (視覚病態学)

当教室の誕生は、明治15年に熊谷茂樹先生が当時の千葉病院眼科医長に就任した時に遡る。荻生録造教授を初代とし、2000年現在、116年の歴史があり、私が8代目となる。

当教室では白内障、網膜剥離、緑内障などめまなく、最先端の治療はもとより視神経疾患に特に力を入れており、来年開催される日本眼科学会総会での特別講演に向け、症例のまとめに教室員が力を注いでいる。当教室のもうひとつの特色は

国際網膜色素変性症協会の日本支部が設立されていることである。そのため、ロービジョン外来も開放し、情報公開や教育、患者の皆さんの交流も行っており、日本全国から患者の皆さんが当教室を訪れている。

研究面では視覚電気生理学を中心として、視神経移植、近視の成因・病態、プロスタグランディンの動態など多岐にわたっている。

海外での活動も活発で、Bascom Palmer Eye Institute & Schepens Eye Research Institute に医局員が留学し、研究を行っている。学会活動では近年当教室が主幹で行った日本眼科

学会や神経眼科学会はもちろんのこと、各種学会に積極的に参加している。海外での学会も同様で、Association for Research in Vision and Ophthalmology や International Society for Clinical Electrophysiology of Vision など Annual Meeting 多くの医局員が参加している。

臨床面では緑内障、糖尿病網膜症、硝子体、ぶどう膜炎など数多くの特殊外来を設けており、それぞれの専門医が診断、治療にあっている。一日の外来患者数は約300人で、人手、機材など、ぎりぎりのところで外来診療を行っている。病棟は30床で慢性的な病床状態が続いている。手術日は月曜午後外来手術、火曜・木曜に入院手術を行い、緊急手術も随時行っている。手術も各専門医が行うことが多く、良好な成績を上げている。

当教室には毎年6人前後の研修医が入局し、2年目の研修医と上級生とともに3人のグループで研修にあっている。2〜3年目からは25の関連病院で研修を続けたり、大学院に進学して研究を行っている。現在

医局に在籍する医師は約80名おり、研究・診療に力を注いでおりますが、今後より高いレベルの医療を目指

して行きたいと思っております。
教授 安達恵美子

小児科学講座 (小児病態学)

小児科学講座の創設は、昭和年に遡ります。この80年以上にわたる歴史において、前任の新美仁男先生をはじめ中島博徳先生、久保政次先生など代々の教授が教室の発展に尽力され、平成10年7月より河野陽一が教室を引き継がせて頂きました。

この間多数の小児科医が当教室から巣立っていきまし。現在同門会員数も400余名に達し、毎年4月29日に開催される同門会では、新入医局員の紹介と会員の親睦が図られております。関連病院も県内の主要病院のみならず、東京をはじめ近隣に広がっており、日本の小児医療において重要な役割を果たしております。小児科医の不足が強く指摘されているなかにおいて、例年8名前後の若い人材が入局し、更なる教室の発展が期待されているところです。

小児科医には、小児の健全な発育をサポートするという重要な役割のもとに、周産期医療・新生児医療から各小児内科専門領域に深い造詣が求められるように

なりました。さらに、小児保健への理解も必要とされ、小児の健康と病気を総合的にとらえる力が求められています。同時に、大学の使命として、臨床医学で得られた情報を次世代に引き継ぐための研究活動も必要とされ、当教室では総合力のある臨床医の育成と同時に、各分野の専門性の追求をバランスよく遂行することを目標にし、教室員一同努力している次第です。

学生の教育についても、新しい試みであるチュートリアル、クリニカルラークシップおよび総合講義に意欲的に参加し、社会のニーズに応えるべく活動しています。社会の高齢化、大学病院の独立法人化など大きな変化に直面しておりますが、来るべき社会を支える若い世代の健康を守る小児科医の役割は、ますます重要となっていくと見ます。この期待に対し私共も一層努力する所存であります。今後とも御指導、御支援のほどよろしくお願い申し上げます。
教授 河野陽一

脳神経外科学講座 (神経機能統御学)

千葉大学脳神経外科学講座は昭和46年1月に開設し、初代の牧野博安教授、平成3年10月より2代目の山浦晶教授の下、28年目を迎えた。また関連施設を含めた研究・臨床組織は20数名の人数から現在の100人に及ぶ大所帯へ発展した。臨床重視の地域医療の充実から、研究面の発展を目指している。この間、脳神経外科そのものの進歩発展は目覚ましく、その軌跡は救命を目的としたものから、Quality of Life を重視した患者本位の治療学の模索の過程である。古い手術法が消え、新しい診断法や手術法が誕生し、脳神経外科学は変化と進化の時代を生き抜いてきた。

現在、千葉大学脳神経外科学教室は、教授を含めた9名のスタッフ、5名の大学院生、4名のチーフレジデント、3名のフレッシュマンの活動の場である。

我々の教室は脳神経外科全般にわたる教育・診療・研究を行っている。臨床研究では、まず、重症頭部外傷の診断と治療に重点を置いてきた。昭和50年頃より登場したCT スキャンを駆使することで、いち早く頭部外傷の

病態把握に務め、その治療法の進歩に大いに貢献した。基礎研究では、頭部外傷の病態把握のための動物実験が昭和50年代後半より米国 UCSF と昭和60年代からは Pennsylvania 大学と提携し行われ、また、当教室内でも現在も、Microglia と Spreading Depression の神経損傷への影響などのテーマで研究が進行中である。現在3人を欧米諸国に留学生として送り国際的視野より基礎研究を行っている。

脳血管障害、特に後頭蓋高の動脈瘤の診断と治療は現教授のライフワークであり、脳底動脈瘤の手術例は他に類を見ない経験数を有し、また、頭蓋内解離性動脈瘤の全国調査を施行しその自然歴の解明と治療法は高く評価されている。この10年来血管内手術による脳血管障害に対する治療が脚光を浴び、脳動脈瘤、脳動静脈奇形の塞栓術や、さらに、食生活の西欧化により発生頻度が高くなった頸動脈狭窄症に対する頸動脈内膜剥離術やステント留置術なども盛んに行われており、幅広く脳血管障害に対応している。また、その予防の観点から、脳ドックをどう

有効に活用するかについても臨床例を中心に研究が進められている。また、最近では、脊髄空洞症の原因としてのキアリ奇形との関係を明らかにし、その新しい外科治療法を提唱し、脊髄・脊椎疾患の手術・管理法に積極的に関与している。その他、良性腫瘍に対する手術法の工夫、悪性腫瘍の化学療法、さらには遺伝子診断なども平行して臨床、基礎の両面より研究されている。また、平成9年度より脳腫瘍や脳血管障害などに有効な治療手段となる脳定位的放射線療法 (ガンマナイフ手術法) の機器が千葉県循環器病センターに設置され、他の方法にならんで治療法のオプションとして高い評価を得ている。神経内視鏡下の手術法により、腫瘍の生検術や水頭症の治療も行われている。機能的脳神経外科疾患の診断・治療に関して、MEP を駆使し、さらに、てんかん患者の管理上従来薬物療法が主体であったが、種々の電気生理的検査法を駆使し、選ばれた症例には手術療法を行い良い成績を納めている。

我々の目指すものは、より安全なそして効果的な患者のための医療であり、し

かも患者とその家族への心理的、社会的、経済的負担への配慮を忘れないことであると考えている。

教育においても、当大学において知識伝達型の従来の講義形式や bedside teaching から、学生の主体性を尊重し、自己学習のチュートリアルシステムや bed side learning への移行、 bedside learning の advanced course としてのクリニックなど、教育改革には目覚ましいものがあるが、それらが期待された効果を発揮するには今しばらく時間を要すると思われる。いずれにせよ、当教室にては、患者管理を知識としてだけでなく良い医師としての態度、習慣を学ぶべく指導している。

この間全国規模の学会として昭和59年には第43回日本脳神経外科学会総会（牧野博安会長）を、平成3年に第11回日本脳神経外科コンgres（山浦晶会長）を

千葉で開催した。その他昭和54年第2回日本神経外傷研究会、昭和56年第9回小児神経外科研究会、平成9年第20回日本神経外傷研究会、第6回脳神経外科手術と機器学会、平成10年には第26回日本小児脳神経外科学会、平成11年には第13回微小脳神経外科解剖セミナーなど主催し、脳神経外科学の進歩に貢献した。

大学に課せられた教育・

研修、研究、診療などの責務とその周囲の期待は時代の流れとともにより大きいものになる一方で、国立大学の独立行政法人化、DPC・CPOの採用の可能性、卒後臨床研修必修化の導入など、我々を取り巻く医療・教育環境には目覚ましい変化が待ち構えている。そういった時代の流れを感じつつ、日々の診療、教育、研究を地道に続けている。心より明るい将来が開けてくることを期待し、教室だよりとする。

教授 山浦 晶

神経内科学講座

（神経機能病態学）

当教室は昭和43年に発足し、初代の教授は平山恵造先生で、平成7年9月より私が第2代目の教授に就任しております。現在教室員は約70名で、常勤医として出向している病院には、松

ンセンター、J R 東京総合病院、下都賀総合病院、沼津市立病院、旭神経内科病院などがあります。現在、高齢社会がすすんでいるせいか、脳卒中や痴呆、パーキンソン病などの神経疾患患者が増加しており、神経内科医の需要が増え、派遣を依頼される病院も多いのですが、残念ながら十分期待に答えられないのが現状です。

神経内科学は脳、脊髄、末梢神経、筋肉の疾患をとりあつかう学問で、近年のめざましい神経科学の進歩により、病態機序の解明が着々とすすんでおり、診断・治療面においても、画期的といえる進展がみられつつあります。しかし、まだまだ未解明のところも多く、研究テーマはいくらでも見つけ得るという、若いひとにとっても魅力的な分野です。現在、教室で行っている研究テーマは、炎症性ニューロパチーの病態、各種神経疾患における自律神経障害の病態、神経因性膀胱の診断と治療、PET による神経伝達物質からみた神経変性疾患の病態、失語・失行・失認などの高次大脳機能障害、脳血管障害や脊髄疾患などの神経症候学、神経変性疾患の臨床病理学、多発性硬

化症やアルツハイマー病の発現機序、重症筋無力症の治療などでありますが、今後、これらの研究をさらに発展させていくと共に、新しい分野の開拓も視野に入っておかなければと考えております。

すぐれた臨床医を育てると共に、研究にも力を入れ、臨床医指向のひとと研究者指向のひとと満足できる柔軟な教室運営をしていきたい、そして、脳の世紀とよばれる21世紀にふさわしい人材を育成していきたいと念じています。

神経内科の診療対象
脳、脊髄、末梢神経、筋肉の病気
疾患・脳血管障害、Alzheimer 病、脳腫瘍、脳炎、髄膜炎、てんかん、多発性硬化症、筋萎縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症、パーキンソン病、重症筋無力症、変形性脊椎症、脊髄血管障害、脊髄腫瘍、ギラン・バレー症候群、多発ニューロパチー、多発筋炎、筋ジストロフィーなど

症状・頭痛、めまい、運動麻痺、しびれ、歩行障害、痴呆、意識障害、けいれん、立ちくらみ、尿失禁、言語障害、不随意運動 など

教授 服部孝道

小児外科学講座

（発達機能学）

日本における小児外科は、欧米より30年、40年遅れて、昭和28年頃より始められたといわれております。千葉大学においては、第一、第二両外科で、日本の中では早くから小児外科に取り組んでおりました。昭和33年の日本外科学会における小児外科の特集では、第一外科の福岡誠吾先生が小児の術後管理の発表をなされ、昭和37年には、第二外科の柳沢文憲先生が本邦8例目の先天性食道閉鎖症の手術に成功なされております。日本小児外科学会が発足したのは昭和39年ですので、千葉大学は日本の小児外科の発展に、その揺籃期より関与していたことになりました。しかしながら、正式に診療科として文部省に認められたのは、昭和51年12月で、高橋英世小児外科助教授を科長として、第一外科・第二外科の研究班が合併してスタート致しました。平成2年7月には附属病院診療科から、医学部小児外科学講座となり、平成9年9月からは、初代の高橋英世教授を引き継ぎ、2代目の教授として私が講座を担当しております。

膜ヘルニア、直腸肛門奇形、ヒルシュスプルング病、先天性小腸閉鎖症、臍帯ヘルニアなどの新生児疾患から、胆道閉鎖症、胆道拡張症、肥厚性幽門狭窄症、腸重積症、鼠径ヘルニアなどの乳児疾患、悪性固形腫瘍、泌尿器疾患などの幼児疾患、虫垂炎、漏斗胸などの学童期疾患と、その対象疾患は様々であります。他の外科系小児共通ベッドも含め、28床のベッドで入院患者をこなしております。生後12時間以内発症の先天性横隔膜ヘルニア、胆道閉鎖症、神経芽腫などの難病疾患以外はほとんど死亡しなくなりました。あのはな同窓会の先生方には、24時間いつでもご紹介を受けておりますのでよろしくお願い申し上げます。

研究としては、悪性固形腫瘍、とくに神経芽腫の遺伝子診断・遺伝子治療、小児内視鏡診断ならびに鏡視下手術、小児胆道疾患の診断・治療、消化管機能、代謝・栄養などを柱として積極的にとり組んでいます。大学院生には、学内や学外の研究施設に派遣し、基礎的研究に没頭する機会を与えております。それらの成果は国内の学会はもとより、海外でも発表してもらおうよ

平成2年の講座誕生と

千葉大学医学部麻酔学講座は昭和40年（1965）に故米沢利英教授の赴任により発足しました。発足当時の定員は教授以下9名であり、この人数で付属病院本館・別館の12カ所に分散した手術室で臨床業務を行なわねばならない状況にありました。教室発足後10年以降には教室の研究体制や診療体制も整い始め、昭和53年（1978）には新病院への移転に伴って、近代的な設備を備えた病院での臨床業務が行える環境となり、ようやく現在の教室に近い形が整いました。昭和60年には米沢教授の退官に伴い、国立がんセンターより水口公信教授（現名誉教授）が第二代目教授として赴任し、診

教授 大沼直躬

療・教育・研究で飛躍的進歩が見られました。診療に

関しては従来から行われていた手術室での麻酔業務や疼痛外来に加えて、がん性疼痛や末期医療の方面にまで教室の推進する守備範囲が拡大し、教育に関しても学部学生および研修医に対する数多くの改革がなされました。研究面ではがん性疼痛の緩和や末期がん患者の管理についての臨床的研究や疼痛発生のメカニズムに関する基礎的研究が精力的に行われるようになりました。平成6年(1994)には水口教授の退官に伴い、西野卓が三代目教授として赴任し現在に至っています。現在の助手以上の教室員は教授以下10名であり、この

教授 西野 卓

発生医学講座・免疫発生学

田富雄)を前身としています。

A large group of approximately 40 people, mostly young adults, are posed for a group photo on a rooftop. They are arranged in several rows, with some standing and some kneeling or sitting in the front. They are dressed in casual to semi-formal attire typical of the late 1960s or early 1970s. In the background, a dense urban landscape is visible, featuring a prominent multi-story building with a grid-like facade and other city structures under a clear sky.

本研究室は、昭和47年に設立された環境疫学研究施設免疫研究部（初代教授多

雄所長）助教授から千葉太学に赴任しました。T細胞の分化を決定する細胞内シグナル伝達の研究が中心で、アレルギー発症に関わるタイプ2のヘルパーT細胞の分化機構の研究、ポリコーム遺伝子によるサイトカイン遺伝子発現の調節機構の研究、そして小児科（河野教授）との共同研究でヒトでのアトピー素因の原因遺伝子の同定を行っています。

大学院の教育方針としては、医学・生命科学領域での研究者や研究指導者の養成をめざしています。学生の

火曜日から金曜日まで毎日 discussion の時間をもつて、日々の実験結果について討論しています。大学院生の間にも学位論文をまとめるころとはもちろんですが、すこしでも多くの学生が新しい発見の喜びを味わうことが出来るよう、最大限の助言と

研究環境の提供を心がけて
研究指導を行っています。

助教授 中山俊憲

究生生物学

数人のポスドクおよび学生とともに、谷口克医学部長の研究室に間借りしながら

研究をスタートアップしました。その後、講師として青江知彦（昭62卒）と助手

雄所長）助教から千葉太学に赴任しました。T細胞の分化を決定する細胞内シグナル伝達の研究が中心で、

発生医学講座・発生生物学

助教授 中山俊憲

究生物学

数人のポスドクおよび学生とともに、谷口克医学部長の研究室に間借りしながら研究をスタートアップしました。その後、講師として青江知彦（昭62卒）と助手

として赤坂武(平3卒)を加えて、研究ならびに大学院教育に従事しております。その間、磯野可一学長、谷口医学部長らの御尽力により、平成11年5月に医学部本館大講義室跡に研究室が新設され、独立した研究グループとしての構造を整備していただきました。

公務員の人員削減が叫ばれ続けている中、このような新しい研究グループの設立が国によって認められたことは驚きに値します。その大きな理由のひとつが、千葉大学医学部における長年にわたる生命科学研究成果が評価されたことであることは明白です。また、発生生物学研究の社会的ニーズが高まってきていることも、もうひとつの理由であると考えます。発生生物学研究の成果は、来るべき再生医療やがんなどの遺伝子治療のための理論基盤の中核を構成していくことは自明であり、それを見越して様々な他の学問分野から人材が集まり学際的な分野として発展しつつあります。例えば、最近大きな話題になった乳類のクローン化技術も、発生生物学者によって30年以上にわたって維持されてきた研究のひとつの結論であり、まだ、ヒトへ

の応用は多くの倫理的な問題がクリアされていらないため不可能ですが、再生医療に計りしれないインパクトを与えたわけですから、また、21世紀初頭には、ヒトゲノムの全塩基配列が決定されることがほぼ決定的になり、ポストゲノムと言われる時代が訪れます。このようなゲノムデータを実際の医療に反映させていくためには、まだまだ多くの実験的手続きが必要であり、その部分で発生生物学的な考え方や実験方法が重要な役割を果たしていくと考えられます。

このような社会的な趨勢の中で、私たちの研究グループに分担されている研究テーマは、脊椎骨のパターン形成の分子メカニズムについての解析とそこから派生してきた染色体の機能維持のメカニズムの解析の2点に集約されます。遺伝子というかたちの見えないものを、我々が目で見え、そして理解できる代物に変換するためには多くの時間と労力を必要としますが、我々は、マウスと鳥類の胚を用いて遺伝子操作をすることで個々の遺伝子の機能を追求しています。マウスでは遺伝子ターゲットング法による遺伝子欠損マウスの作成と解析による遺伝子機能の解

析を基本としており、一方鳥類を用いた実験では、昔ながらの顕微鏡下での微細技術に基づいた遺伝子機能の解析を行っています。マウスはからだの大きさと生存期間以外はヒトとほぼ相同と考えられ、実際ゲノムDNAの塩基配列も極めて相同ですので、マウスを用いた研究成果をヒトに応用していくことに大きな困難はないと考えています。

このような私達の研究を支える基本的な駆動力は、私達のからだの秩序についての理解を求める心です。おそらく人類が自我を獲得したとともに、自分自身に対する理解を求め、様々なタブーを打ち崩されることで解剖学が切り開かれたと想像します。それに伴って、どのように秩序が生じるのかについての理解への欲求が必然的に高まり、発生生物学が生じてきたと考えます。発生生物学は、時代とともにその形態を変遷させており、現在では分子生物学と遺伝学の進歩とともに、発生生物学はゲノムDNAにコードされるからだの設計図(ボディプラン)を読み取る学問分野への変遷を余儀なくされました。実験や考え方の方法論が変化しただとしても、このような人

間にとって根源的かつ共有された欲求が、現在でも私達の研究を支えているわけです。したがって、私たちの研究グループで大学院を過ごす方々には、その4年間の間に、ボディプランを読み取るための基本的な作法だけでなく、その底流となっている考え方を各自なりに理解していつともいいたいと思っています。そうすることで、発生生物学に限らず、新しい市場を切り拓くことのできる能力とモ

発生医学講座・分化制御学

教授 古関明彦

チベーションを持った人材を養成していきたいと思っております。また、発生生物学やその手法に興味を持っていらっしゃる方は、遠慮なく遊びにいらしていただきたいと思っています。ききたいと思っています。けっして広い研究室ではありませんが、様々なバックグラウンドを持った方々が学問を介して交流できる場所としても機能できれば幸いです。

にも研究内容の大転換が行われ、遺伝子操作を中心とした発生工学技術に応用して高次生命機能の解明にむけての分子レベルでの研究がスタートしました。1996年には、高宮の後任として岡田誠治(自治医大60卒)が助手として着任し、1997年には、幡野が助教授に昇任し教官定員面での転換が完了しました。そして1998年から、高次機能制御研究センターの廃止転換にともない、大学院講座としての分化制御学に改組されました。

研究面ではトランスジェ

ニックマウス法や遺伝子ノックアウトマウス法を用いて、高次生命機能を生体レベルで解析したり、疾患モデル動物を作製して治療応用をめざしています。徳久は主に免疫学研究(リンパ球の分化増殖機構、免疫記憶の形成機構、アレルギーの制御機構)、生体内発癌機構の解析等、高次生命機能とその異常を生体レベルで研究しています。また、幡野は神経細胞からの末梢神経分化や生体内発癌機構の解析、様々な疾病モデル動物の作製を、岡田は血球系幹細胞の維持や分化を主要なテーマとして研究しています。1999年には文部省の特別設備費により大型機器がそろえ



当教室の前身は、1981年に設置された医学部附属農山村医学研究施設農山村医学研究部に始まります。柳沢利喜雄教授と内田昭夫教授が、農山村における保健衛

工学の技術を取り入れた方向で研究する教室として位置付けられました。1989年に徳久剛史が教授として、幡野雅彦(昭57卒)が助手として着任し、高宮恒治と

られ、1996年よりなんとか不自由なく研究をすすめることが出来るようになりました。そして、免疫記憶形成に必須の新規遺伝子の発見(Exp.Med.1997)、巨大結腸癌モデル動物の作製(Clin.Invest.1997)、新規細胞死(アポトーシス)抑制遺伝子の単離(D.N.A.S.1999)、血球系幹細胞維持機構の解明(Blood.1999)等の研究成果を発表してきています。詳細はホームページ(<http://degenol.m.chiba-u.ac.jp/>)を参照ください。

教育面では当教室は大学院講座ですので、その教育対象は大学院生であり、医学部での教育は分子病理学の一部を担当しているにすぎません。現在の医学部では、医師になるために学ばなければならないことが増えて、大学教育で一番大切な自由な考え方や創造力を身につける事を教えるための時間的ゆとりがほとんどないのが現状です。そのため大学院での教育の重要性が増してきています。当教室では、大学院生に研究活動を通して新しく物事を創造する方法や喜びを理解してもらえ、心をかけて教育しています。現在当教室には、事務系職員2名、ポスドク1名、

臨床系からの大学院生・研究生20名、中国、韓国、インドネシアからの留学生各1名ずつがおります。教育面での特色の一つは、2年間の在籍期間で学会の英語発表程度は難なくこなせるようにするため、研究室内でのミーティングは英語で行っています。今後は、遺

肺癌研究施設

第二臨床研究部門(呼吸器内科)

当教室は、昭和44年1月に創設され、渡邊昌平名誉教授が初代教授であります。当時は、肺癌研究施設にすでに設置されていた外科部門、病理部門に併設するかと、第二臨床研究部として出発いたしました。現在、肺癌研究施設第二臨床研究部門として、学内55名(大学院生28名を含む)、教育関連施設でのローテーター60名を加えた総勢115名の医局員で臨床及び研究活動に邁進しております。現在、

大学病院診療体制の再編成により、診療科名の再検討が行われようとしておりますが、当教室は、当初より呼吸器内科として広く呼吸器疾患を専門としております。教育関連施設としては、千葉、東京、埼玉、栃木、神奈川、静岡の1都5県、43の施設に同門会員が勤務

伝子治療など臨床系講座との共同研究を視野に入れないが、生命科学研究における飛躍的な成果を得るべく、更に一層の努力をしていきたいと思っております。るのはな同窓会の先生方のこれまでに劣らぬご指導ご鞭撻を切にお願い申し上げます。

教授 徳久剛史

し、医局との間で人的交流を行ういつつ、いくつかのプロジェクトについては臨床研究を共同で行っています。また、コロラド大学、ニューヨーク大学などに留学生を派遣し、シンガポールの日本人診療所では診療に携わっており、国外の研究者との交流を図っています。また中国からは、当教室に留学生が数名訪れ、肺循環や肺癌についての研究交流が行われております。

学会活動としては、昨年(平成11年)8月に、全国より71名の呼吸器専門の講師を招き、4日間にわたる第39回臨床呼吸機能講習会を主催しました。全国より4コース350名余の受講生の参加が得られ、呼吸器専門医のみならず、若手医師や理学療法士、看護婦などにも広く好評を得ました。

また、同年10月には第36回日本臨床生理学会総会を主催、こちらでは、呼吸器のみならず、循環・神経・腎臓・内分泌など多分野にわたるシンポジウムで活発な検討が展開されました。

来るべき超高齢化社会において、呼吸器内科は、呼吸不全・呼吸器感染症・肺癌など、高齢者に深く関連した疾患を扱っており、重要な役割を担っていると考

えております。各疾患の疫学的、分子生物学的検討などにより、その成因を解明するとともに、臨床的には在宅医療支援の方法論の確立など、我々に課せられた命題は大きいといえます。それらに対し、教室では、呼吸不全や肺癌患者のQOL調査、肺癌検診、肺高血圧、睡眠時無呼吸症候群、合併症肺癌の治療法の開発、遺伝子治療の方法論の検討、遺伝子治療の方法論の開発など、臨床から基礎的研究まで幅広く研究活動を展開しております。また日本において慢性肺血栓塞栓症に対する認識が普及する以前から本疾患に着目し、その鑑別診断、内科的および外科的治療指針の確立、手術前後の臨床評価法の体系化などを第一外科学教室と共同して行ってきたいま

す。また、原発性肺高血圧症に対しても、これまで3回の全国調査を行い、治療指針の確立並びに予後規定因子の解析などを行ってきました。これらの実績が評価され、肺移植ネットワークの構築および中央肺移植適応検討委員会にも参加させていただいております。

現在、進行中のプロジェクトとしては、厚生省特定疾患呼吸不全調査研究班の班長として、若年性肺気腫、ヒストサイトーシスX、原発性肺高血圧症、慢性肺血栓塞栓性肺高血圧症、肺胞低換気症候群、肥満性低換気症候群を対象に臨床調査研究を多施設共同で進めております。本研究成果の一部に、原発性肺高血圧症および慢性肺血栓塞栓症が特定疾患の治療対象疾患として認定されたことがあげられます。肺移植や在宅酸素療法、非侵襲的在宅人工呼吸療法法の普及など多くの課題について全国的な研究が展開され、毎年その成果が報告されています。また、日本で第一号の車載型らせんCT検診車を利用して、肺癌CT検診の有用性の検討を千葉県下で行っております。

創設30年余り、同門会員約200名の比較的歴史の浅い教室ですが、その役割は重大であると認識し、日々研鑽に努めております。今後

肺癌研究施設・病理研究部門

も、皆様のご支援、ご助力をお願い申し上げます。教授 栗山喬之



肺癌研究施設の第一臨床研究部門は1989年に創設され、私どもの病理研究部門は1989年に増設されました。同年に井出源四郎先生が初代教授に、1989年には二代目教授として林豊先生が就任されました。1991年に林豊教授が停年により退官され、同年に私は三代目の教授に就任しました。ここでは最近の病理研究部門についてご紹介いたします。

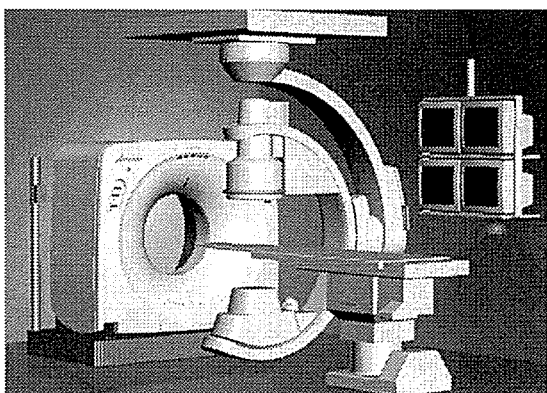
学部学生への教育の面では、病理学総論で腫瘍学、病理学各論で呼吸器病理学、また病理学実習や学生によるCPCなどを担当しています。研究業績面では原発性肺癌例にしばしば発見される、前癌性変化と考えられている異型扁平上皮化生細胞および異型腺腫様過形成細胞の遺伝子異常を検査し、p53の突然変異、3p、9p、10qの突然変異、これらの異常は同時に存在した肺癌の癌細胞の遺伝子異常と同様であり、異型扁平上皮化生細胞および異型腺腫様過形成細胞が肺癌の前癌性病変であることを明確にしました。

また、同一個体において異時に肺に癌が見られることがあり、あるいは同時に多発性に肺に癌が認められる場合があります。これらの場合に病理組織像に明らかな差異が認められれば異時性あるいは同時性多発性肺癌との診断が可能です。しかし病理組織像に差異が認められない場合には原発再発、転移かの診断が困難なことがあります。異時性あるいは同時に見られた癌の癌細胞の遺伝子異常を比較することにより、確実な診断が可能であることを示しました。原発性肺癌へのヒトパピローマウイルス(HPV)の関与をPCR法によって検討しています。その結果、HPV16型のウィルスのゲノムが検出されましたが、その検出頻度は低いことが明らかになりました。肺、胸壁、縦隔などの胸部に認められた肉腫の腫瘍細胞の遺伝子変異を検索しています。その結果、p153のマイクロサテライトマーカーを用いて検討したLOHの有無によって肉腫患者の5年生存率に差があることが明らかになりました。心筋炎発生の抑制を試みる動物実験を行っています。また、心筋炎患者の末

梢リンパ球は選択的スプラインングにより可溶性 γ Gを産出しますが、炎症が遷延する症例では持続的に高値を示します。また、血中の可溶性 γ Gリガンドは心筋炎による心不全の重症度を反映していることを明らかにしています。

日常業務として第一、第

附属病院放射線部



二病理と共に剖検例の肉眼、顕微鏡検査、さらに病院病理部の病理組織診断を分担しています。これに加えて肺外科での手術例および肺外科、呼吸器科からの内視鏡による生検標本等の病理組織診断を行っています。

教授 大和田英美

放射線部は昭和48年、寛弘毅部長（放射線科教授兼任）のもとに専任教官2、放射線技師6、看護婦1、事務官1で中央化された。昭和49年館野之男部長が任命され、人員構成は部長（兼任）1、専任医師2、放射線技師30となる。昭和51年内山曉部長が専任で放射線部を運営するようになり、

棟B1にインビトロ室増設検査が開始され、昭和59年MR装置が稼働開始した。昭和61年新C棟増設、サイクロトロン、ポジトロンCTを新設、MR、DSA、泌尿器系撮影装置を移転する。昭和63年冠動脈疾患治療部の新設に伴い血管撮影装置が1台増設され、平成2年植松貞夫部長専任教授

となる。平成6年北原宏部長就任、MR棟が新設され平成7年にはMR装置二台となる。平成8年ガンマカメラ3台更新され、平成9年新リニアック棟増設し新装置が導入された。又、3台目として螺旋型CTが導入され、3次元画像も容易に出来、診断治療に寄与している。平成12年中には最新のマルチスライス可能のIVRCT（写真）と、カルデアック・アンギオ・バイプレーン・システムの更新も行われ、さらにサイクロトロン及び合成装置の更新と新PETカメラの使用が予定されている。平成11年の構成は部長（教授）1、助手1、医員2、技師長1、副技師長2、主任技師10、技官19、事務補佐員3の合計39名である。業務分担はX線診断部門、MR部門、CT部門、放射線治療部門、RI部門の5部門として対応している。平均年間業務量は患者数12万人前後、フィルム30万枚を数え、機器の性能向上につれ右肩上がりの状況が続いている。一般撮影部門はCRを主とした撮影装置12台、断層撮影装置3台、パントモ1台、透視撮影装置8台、血管撮影装置3台、ポータブル装置

8台、MR部門は1.5TのMR2台、ポジトロンCT、サイクロトロン、乳房撮影装置、泌尿器撮影装置、CT・治療部門はCT3台、リニアック照射装置1台、治療計画用CT1台、シュミレーター1台が稼働している。RI部門はインビボ検査件数が増加しているが、インビトロ検査は検査部へ多くの検査項目が移行された。放射線部は機器管理・運営、全診療科への診療・研究支援を行っており、全ての画像診断部門としては機能されていない。これは病院創設当時から伝統として、診療・研究業務は各科の担当医師が放射線部の装置を使用し検査を行い診断治療を行って来た事であり、北米や日本の幾つかの大学の様に放射線科なり部に多くの診断スタッフを擁して診断報告書を作成するには至っていない。最新機器の導入に人が伴わないことは悩みの種ですが、今後放射線科と一体となって、多くの放射線診断専門医の養成が必要と思われます。各種診断治療装置及び技術の開発・進歩はコンピュータの目覚ましい発達と相俟って止まるところを知らない勢いであり、個々の機器に精通した専門医師と専属技

師が協力して診療研究に携わる必要を痛感しています。更に、インターベンショナル・ラジオロジー、ミニマム・インベイスブ・サージェリーの発展は、外科系内科系のバリエーションが進展、観血的手術に近い手技が放射線部施設内で多くの診療科が行っていますので、それに対応すべく努力をし

附属病院薬剤部

現在、薬剤部は常勤薬剤師23名（教官2名）と非常勤薬剤師9名の計32名で運営されています。明治32年の病院職制の改正に伴い、調剤局と言う名称が使われはじめたことから理解できませんが、薬剤部は調剤のみを行っている部署と考えられている方がほとんどではないかと思えます。勿論、調剤は薬剤部における主要な業務には違いないですが、医療費の効率的運用に欠くことのできない医薬品管理に加えて、医療の多様化・高度化に対応し、質の高い医療を遂行するために適正かつ詳細な医薬品情報の収集・評価・提供、薬物血中濃度の測定と解析、病棟における薬剤管理指導業務、市販にない特殊製剤の調製、さらには治験薬の管理を行

ております。今後、独立行政法人化、特定機能病院としての高度先進医療の開発・推進に向けてのアプローチは最新機器を擁する放射線部のみの問題としてでなく、附属病院全体をあげて活性化を計って行く必要があると思います。

教授・放射線部長 北原 宏

うなど多様な業務を展開しております。また、医薬品に関する情報パンフレット「いのちのなだより」の発行や、「お薬飲み方教室」を開講するなど、患者サービス向上のため部員一丸となって取り組んでおります。医学部学生に対する教育に関しましては、不十分ながら講義・臨床実習を介して、医薬品の適正使用のための知識を習得してもらおうと努力しております。大学病院の教育・研修の場としての使命は拡大しており、その社会的な期待に応えるべく薬学部学生・大学院学生の実務実習や卒直後の薬剤師研修を行っております。研究は、医薬品の適正使用を目的として、薬効・毒性を規定する重要な因子の一つである薬物代謝酵素を

中心テーマとして行っています。(1)胎児期に特異的に発現する薬物代謝酵素の機能解明から、薬物投与（母体）時における問題回避や新生児期の科学的根拠に基づく薬物療法の構築などの臨床的応用を目指しております。(2)わが国においても代替医療のあり方が議論されはじめております。今後、薬物療法においてハーブ類と西洋薬との相互作用が問題となること十分予想されることから、薬物代謝酵素を介する生薬成分と西洋薬との相互作用に関して臨床応用のための基礎的データの集積を行っています。(3)来世紀は、個々の遺伝情報に基づいた医療の個別化が展開すると言われております。薬剤部でも個々の患者に最適な用法・用量の設定に薬物代謝酵素の遺伝的多形診断が利用できないか検討をはじめています。薬剤師は大学病院においてマイノリティーでありませんが、医療チームの一員として、より良い医療の提供のために部員一同日々努力しております。ゐのはな同窓会の先生方のご支援とご指導をお願い申し上げます。教授・薬剤部長 北田光一

附属病院医療情報部

附属病院に医療情報部が設けられたのは昭和(昭和51年)のことである。数えればもうすぐ25周年を迎えることになる。まだ黎明期にあったコンピュータシステムを大学病院にも設置するという決断を下したのは、文部省と故香月学長であった。一台のコンピュータシステムが旧病院の5階に設置され、事務部に電算企画係が置かれて病院情報システムの開発が始まった翌年に、このコンピュータの守り役として、教官職(助教)が配置されることになった。当時、肺外科に在籍していた私にお声がかかり、外科を10年やって、新たな人生の展開を夢見ていた私は、あまり悩むこともなく引き受けることとした。事務的なコンピュータの利用を目標としていた病院の中で、あまり手出しもできない状況で、ただろうちよるするだけの毎日であったが、医療情報部長を兼任してくれていた野口先生(元手術部長)に「まあ、今は焦らずじっくり勉強していなさい」といわれてほったことを覚えていた。

1977年、新病院が完成まじか、あたらしい病院には新

で、病院業務の全面的な電子化へ一步を踏み出したものである。

SystemCHIBAは8年を経過して、機器の世代も交代し、医療画像のデータベース、新しいネットワークや関連6病院との遠隔医療システムの運用、そして、オーダーエントリーが従来のものに加えて、放射線診断、注射、細菌検査、外注検査などが動き始め、最終目標の電子カルテの実現へと布石がされている。

実務的な仕事を使命としている医療情報部であるが、研究面でも我が国の拠点の一つとなっている。医療情報の施設間交流を目指してデータや通信規格の標準化が、この世界では大きな課題なのであるが、用語や分類などの標準化、用語集の構造化などは千葉大学が国内の先端を担っている。また、電子カルテの開発、特に電子カルテの構造に関するもの、ユーザーインターフェイスの共通化を目指すテンプレート記述言語などに成果が上がっている。学会活動も活発に行っており、1996年にはこの分野の国内最大イベント「医療情報学連合大会」を主催、1998年から2000年の3年間、日本医療情報学会会長を里村が務める

生源入力によって行うもの

など25年の歴史を無駄にはしていないと自負している。ただ、業務の範囲が拡大するにつれて開発やメンテナンスのための必要人員が増えており、事務部電算係の支援を受けてはいるが、現有的スタッフ、教授1、助教1、医員2ではこな

しきれなくなっている。人員の純増が見込めない今日、各診療科や部門から、その部門のシステム開発に関わる人の短期的な在籍が唯一の解決方法かと思う。

独立法人化がまじかに迫っている。効率的な病院運営がますます重要になってくる。情報システムの上手な利用が病院の生命を制するのではないかと思うが、まだまだ医療現場の都合を優先した声が強し。電子カルテはこれらの診療サイドの

声と病院管理上の要請の融合の結果として実現されるだろう。医療情報部はその仲介役をこれまで以上に求められる。

教授・医療情報部長 里村洋一

第二外科 敬 (昭58)

小児外科 小児正訓 (昭62)

(同助手より)

松永 正訓 (昭62)

(同助手より)

千葉大学医学部 人事異動

教授昇任

病理学第二

石倉 浩 (北大昭55)

(北海道大助教より)

臨床検査医学

野村 文夫 (昭50)

(筑波大助教より)

助教昇任

生化学第一

日和佐隆樹 (東大理昭50)

(同講師より)

小児外科学

吉田 英生 (昭53)

(小児外科講師より)

分子生体機構学

柏谷 善俊 (東理大薬昭60)

(筑波大講師より)

講師昇任

病理学第一

湯本 典夫 (日獣大昭60)

(同助手より)

外科学第二

軍司 祥雄 (昭54)

(同助手より)

第二外科

敬 (昭58)

小児外科

小児正訓 (昭62)

(同助手より)

松永 正訓 (昭62)

(同助手より)

千葉大学医学部同窓会名簿(二〇〇〇年版)

発行の御案内

新名簿が平成11年11月発行されました。価格は送料込みで3千円です。名簿の購入申し込み、および申し込み済みの方で本名簿が未着の方は、同窓会事務室まで連絡をお願い申し上げます。なお、既に御購入済みの名簿に乱打がございましたら御連絡下さい。新しい名簿を発送致します。

再度のお願い

日本プライマリ・ケア学会会長

渡辺 武(昭27卒)

前号の「第122号のほな13頁」で日本プライマリ・ケア学会の紹介記事ならびに入会の勧誘をさせていただきました。

幸い90才になられる大先輩から今年3月に卒業された沖繩在住のニューフェイスの先生にいたるまで早速にも御入会いただき、今更ながら同窓会報の偉力に感謝しております。ただ全く目につかなかったといわれる方も多々おられ、編集委員の御好意に甘えて再度呼びかけさせていただきます。

今や戦後第2の敗戦といわれ、日本丸沈没の危機に際しても選挙のことばかり。医療への哲学がないままに介護保険法の発足にあたっての政治的な混乱は、国民にとってこの上ない不幸なことです。受け皿のないま

で連絡をお願い申し上げます。なお、既に御購入済みの名簿に乱打がございましたら御連絡下さい。新しい名簿を発送致します。

地域特性にもとづく医療の在り方について、われわれ医療人が単なる批判団体に止まることなく「ではどうするか」を常に考え日常診療を通じて研鑽、討議する機構が必要です。とにかく一人でも多くの方が参加すること何かを得る、地域医療に貢献する姿勢が今ほど強く求められている時はありません。その場がこの学会です。御連絡をお待ちしています。

ファックス 03-5281-9780

Eメール pc@primary-care.or.jp

龍

病院紹介

市川市保健医療福祉センター

市川市保健医療福祉センター(リハビリパーク)は、21世紀の高齢化社会に対応するために、中核的役割を担う保健・医療・福祉を一元化



した複合施設として市川市柏井町に平成10年9月1日にオープンしました。

開設までの経緯を述べますと、昭和62年2月市川市医療

施設等対策審議会より「老人のための多目的医療施設の建設について」答申があり、平成元年8月用地買収開始、平成6年3月病院開設の許可、平成7年12月保健医療福祉センターの建設着手、平成10年保健医療福祉セン

ターの建設完了、平成10年8月老人保健施設開設の許可、9月保健医療福祉センターの開設となっておりま

す。市川市柏井町は周囲は梨畑など農地で、めばしい施設は近くにありません。交通は最寄りの駅はJR武蔵野線市川大野駅でバスで5分、徒歩で20分、またJR総武線本八幡駅からバスで20分です。車なら京葉道路原木インターでおりて、中山競馬場の前を通り市川松戸有料道路を下貝家の交差点で右折し約2kmです。敷地面積は29,900㎡、建物は地下1階、地上4階建延べ面積26,700㎡で地下駐車場190台駐車可です。

センターは、リハビリテーション病院、老人保健施設の建設について「答申があり、平成元年8月用地買収開始、平成6年3月病院開設の許可、平成7年12月保健医療福祉センターの建設着手、平成10年保健医療福祉セン

ターの建設完了、平成10年8月老人保健施設開設の許可、9月保健医療福祉センターの開設となっておりま

す。市川市柏井町は周囲は梨畑など農地で、めばしい施設は近くにありません。交通は最寄りの駅はJR武蔵野線市川大野駅でバスで5分、徒歩で20分、またJR総武線本八幡駅からバスで20分です。車なら京葉道路原木インターでおりて、中山競馬場の前を通り市川松戸有料道路を下貝家の交差点で右折し約2kmです。敷地面積は29,900㎡、建物は地下1階、地上4階建延べ面積26,700㎡で地下駐車場190台駐車可です。

を支援することを目的としています。訪問看護ステーションは、病気やけが等により家庭において寝たきり又は寝たきりに準ずる状態にあり、かかりつけの医師が訪問看護を認めた人に対し、看護婦等が訪問して看護サ

ビスを提供し在宅での療養が継続出来るよう支援することを目的としています。

次にリハビリテーション病院(永田雅章院長 慶大昭53)について詳しく紹介致します。病床数は100床(新看護3・1看護)、外来は完全紹介制でリハビリテーション科・整形外科・内科・消化器科・歯科(障害者歯科)の5科があります。医師は9人(リハ科4人、整形2人、内科1人、消化器科1人、歯科1人)、看護婦35人、理学療法士9人、作業療法士6人、言語療法士1人、臨床心理士1人、ソーシャルワーカー2人等総勢約100人が常勤職員として勤務しています。平成11年8月までの開院後1年間の利用者は、入院患者数30,615人(1日平均84人)、外来患者数14,587人(1日平均60人)で、平成11年8月だけでみま

残りは浦安市、船橋市、松戸市、鎌ヶ谷市、千葉市のほか、東京都や埼玉県など県外の方も8%程利用頂いております。疾患は、脳梗塞後遺症が36%、脳出血後遺症が17%と過半数を占め、以下くも膜下出血後遺症5%、骨折・頭部外傷・脊髄損傷などです。千葉大出身者は、診療部長内藤茂憲(内科昭59)と医長國行洋史(消化器科昭62)の2名が勤務しております。検査装置としては、CT、MRI、X線骨密度測定装置、超音波診断装置、エルゴメーター、筋電計、脳波計、誘発電位検査装置などがあり、また手術室も備わっており開院後1

年間52例の全麻・腰麻の整形外科手術が行われました。リハビリテーション部門は、機能訓練室は600㎡あり、歩行訓練器や筋力訓練用の器具、日常生活動作の訓練用設備、水中トレッドミル装置など最新のリハビリテーション医療のための器材(低周波治療器3台、ア

ンクルストレッチャー1台、オーバーヘッドフレイム2台、スポット型光線治療器1台、トレッドミル1台、起立訓練傾斜ベッド2台、筋機能訓練測定評価装置1台、重心動揺計1台、電動自動牽引装置2台、歩行訓練用階段

1台などを設置しています。市川市内の65歳以上の全人口に占める割合は10%(平成10年7月現在)で全国平均よりはるかに少ないですが、今後高齢化は徐々に確実に進行するでしょうし、また平成12年4月から介護保険が施行されることにより高齢者へのサービスの中核的施設である保健医療福祉センターの役割はますます重要度をましていくものと考えられます。当院には本学出身者が2名しかおりませんが、ゐるはな同窓会の先生方の御指導、御支援を宜しく御願い申し上げます。(内藤茂憲・昭59)

同窓会員の皆様が発行した書籍について紹介させていただきますので、本の表紙の写真や書評をお頼みしたい先生のお名前などを添えてお送り下さい。

お知らせ

訂正とお詫び
122号で、左記の誤りが
ありました。訂正しお詫
び申しあげます。
鈴木 静夫(専18)
↓鈴木 静夫(昭18)

訂正とお詫び
122号で、左記の誤りが
ありました。訂正しお詫
び申しあげます。
鈴木 静夫(専18)
↓鈴木 静夫(昭18)

千葉大学名誉教授

故岡本昭二先生を偲んで

藤田 優(昭42)



岡本昭二先生

千葉大学名誉教授、岡本昭二先生は平成11年6月13日午後2時2分、下咽頭癌のため千葉大学附属病院において逝去されました。

先生は昭和2年横浜市に生まれ、昭和27年3月千葉医科大を卒業後、皮膚泌尿器科学教室に入局されました。昭和45年12月には故竹内勝教授の後任として教授となり、以後20年余教室を主宰され、平成5年3月停年退職され、千葉大学名誉教授の称号を受けられました。その後は、ご自宅の近くに先生の長年の夢であったとおっしゃられていた岡本皮膚科を開設され、地域医療に貢献されておりました。

先生は梅毒の血清学的研究と疫学的研究の第一人者でした。先生のIgM-IgGの分画(EPHA)の研究結果は現在の梅毒の治癒に関する血清学的判断の基礎ともなりました。先生は、また、

初めてアナフィラキシー性紫斑にDDSを応用し、DDSの皮膚科領域での広い適用の発端をつくられました。主任教授としての先生は教室員の自主性を重んじる方針で、教室のテーマは性病学はもとより、皮膚腫瘍、真菌症、膠原病、黄色腫症、乾癬などに広がられました。在任中、先生は第49回日本皮膚科学会東日本学術大会会長、日本皮膚科学会東京支部支部長などの要職を務められました。さらに専門である性病学においては、長年にわたり、性行為感染症(STD)研究会を主宰され、のちの日本性感染症学会の設立後は常任理事として活躍され、平成元年には第2回日本性感染症学会会長を務められました。そのほか日本皮膚性腫瘍学会理事、日本研究皮膚科学会評議員、日本アレルギー学会評議員など幅広い学会活動をなさっており、また性病学を通じて、海外との交流もなされ、ドイツ皮膚学会名誉会員にも推薦されました。学内においては千葉大学

医学部附属看護学校長、千葉大学医学部附属病院長などを務められるかたわら、スポーツ好きの先生は学生のよき相談相手として、忙しい時間を割かれ、バスケットボール部、ラグビー部の顧問をされておりました。学外におきましても、中央薬事審議会委員、医療関係者審議会専門委員、医師国家試験委員、学術審議会委員などを務められ、千葉県においても、千葉県医師会副会長、千葉県特定疾患医療審議会委員長などを歴任されました。また昭和60年頃からのAIDSの発生に際しては多くの講演やパンフレットの作成に携われ、AIDSに関する知識の普及と社会的啓蒙に努められました。先生は大変お話し好きの人でした。医局旅行にいき、お酒も入ったあとでは先生を囲んで、病気の話はもちろん旧制高校の話、外国旅行の話、天気の話、カメラの話など時間が経つのを忘れてしまふほど話が次から次へと続きました。先生が咽頭癌の手術のあとでは、お話しができなくなり、そんな先生にお会いするのがつらく、あまりお会いできないうち、帰らぬ人になってしまったのが心残りです。謹んでご冥福をお祈りいたします。

千葉大学名誉教授

米澤利英先生を偲んで

西野 卓(昭47)



米澤利英先生

米澤利英先生は、平成11年6月24日肺癌のためご逝去されました。享年79歳でした。

先生は大正8年12月19日にお生まれになり、長じて昭和20年9月東北帝国大学医学部を卒業されました。ご卒業後直ちに同大学医学部外科教室に入局し、副

手、助手、講師、助教授を経て、昭和33年1月には岩手医科大学の麻酔学講座の初代教授に就任なされました。また、昭和40年4月には千葉大学医学部麻酔学講座の初代教授として現在の麻酔学講座を創設し、これを主宰されました。以来昭和60年3月停年により退官されるまでの20年間の永きにわたり幅広い経験と深い学識により、医学の教育と研究にその重責を果たされたほか、千葉大学医学部教務委員長、千葉大学評議員、さらには昭和58年4月

より2年間千葉大学医学部附属病院院長を併任されるなど、大学の発展に尽力されました。このようなご功績により昭和60年4月に千葉大学名誉教授の称号が授与されました。先生の研究分野は広く、小児麻酔、胸部外科麻酔、麻酔下における呼吸・循環の調節、疼痛の発生機序、診断、治療など麻酔学に関するあらゆる方面に興味を示されて研究に専念されました。特に、ライフワークとされた低体温麻酔に関する研究は世界的な業績として高く評価されています。また、日本麻酔学会の設立準備委員として、その設立に尽力したのみならず、日本麻酔学会会長、日本循環制御学会会長と医学の発展に多大な貢献をされました。これらの業績により、平成5年11月勲三等旭日中綬賞を受賞されました。

先生が千葉大に赴任した当時は麻酔学教室の医局もプレハブで実験室もすき間風で実験器具がほこりまみれになるような状態でしたが、そのような悪条件下でも黙々と研究を続けると同時に後進を指導し、苦勞しながらも教室の発展に一方ならぬ力を尽くしました。お人柄は温厚で絶えず細やかな配慮を忘れない先生で、特に学生と共に酒を交わしながら人生を語ることを楽しむ方でした。先生との語りの中で医師のあるべき姿や人生の意義などを教えられ、後の人生に大きな影響を受けた学生も少なくはなかったと思います。千葉大学退官後も名誉教授として

おくやみ

てしばしば教室を訪れ、臨床や研究の良き相談相手として後進の指導にあたって下さいました。先生を失ったことは教室にとって大きな痛手でありますが、先生が築かれた教室をさらに発展させることが、残された教室員一同の義務と考えております。

先生の在りし日の面影を忍びつつ、ご逝去を悼み、ご冥福を心よりお祈り致します。

- | | |
|-------------|-------------|
| 岩城 常次(大8) | 赤松 弘光(昭19) |
| 松本為一郎(大14) | 染谷 親俊(平壤19) |
| 亀井 清安(昭10) | 金田 丞亮(昭20) |
| 井原 秀博(東医11) | 高瀬 晴夫(専20) |
| 小川 三天(岩専11) | 池田信次郎(京専20) |
| 石川 洋(昭12) | 川村 広郎(昭21) |
| 小林 武雄(昭12) | 奥田 八雄(昭22) |
| 小松 源二(昭12) | 八巻 喬郎(昭22) |
| 田中 幸夫(昭12) | 関 保(専23) |
| 丸嶋 正夫(日齒12) | 大西 盛光(昭24) |
| 熊谷 利雄(昭13) | 谷 宏(昭25) |
| 久保 政次(昭13) | 船越 文雄(昭25) |
| 桜井 実(昭13) | 細根 秀夫(昭26) |
| 鶴沢 栄一(昭14) | 馬島 昭三(昭28) |
| 古山 誠(昭15) | 木川田隆一(昭30) |
| 中島 尚(昭17) | 田村 良男(昭31) |
| 赤澤 勇(昭18) | 田中 明(昭35) |
| 野方 重任(昭18) | 小林 厚夫(昭43) |
| 池田 博(専18) | 安藤 豊彦(東邦52) |
| 坂本 一夫(九専18) | |

各地るのはな会 だより

千葉県のるのはな会

平成11年5月29日(土)千葉京成ホテルにおいて、11年度総会が開催された。渡辺武会長挨拶ののち議長に会長を選出、議事に入り、役員改選・会則改定・会員名簿改訂に関する件が大浜博利(昭27)により上程され、それぞれ承認された。次で会務報告を茂又眞祐(昭22)会計報告を石橋祝(昭22)、監査報告を国井光智(昭21)が行った。

引き続き来賓として東京るのはな会会長の貫洞一夫先生、大学るのはな会会長の近藤洋一郎先生にご挨拶を頂き、総会は終了した。来賓として予定されていたるのはな同窓会会長の井出源四郎先生が重要な会議にご出席のため、おいで頂けなかったのは残念であった。5分間の休憩の後、講演会が行われ、座長をこの度千葉県のるのはな会の役員になつて頂いた若新政史名誉教授にお願いし、「現代免疫事情」と題してその道のバイオニアである谷口克医学部長の有意義な、しかも

分かりやすくユーモアを交えた講演を伺うことが出来た。内容は免疫系の生物学的な意義は自己・非自己の識別であり、これは胸腺で行われているという事から始まり、生体防御のからくりは、免疫系が自己主張し非自己を排除した、たまたまの結果に過ぎないという事。サイトカインはリンパ球同士が会話する言葉であり、谷口教授の発見された第4のリンパ球NKT細胞の働きについて言及された。免疫学の発展により、先端医療の進歩は、非自己反応性リンパ球の反応を抑えることにより臓器移植が可能となり、免疫細胞を遺伝子のベクターとすることにより遺伝子治療が進み、また抗原ペプチドを使ってワクチンの開発が可能になる。また遺伝子研究により遺伝子(遺伝素因)診断がより加速し、クローン研究は生殖医療の加速、再生医療のスタート、生命発生機構の解明にも貢献するであろう。そして21世紀の医療は遺伝子による画期的診断、原因となる遺伝子標的治療、集団医療から個人医療へ、病気のリスク診断に基づく個人の責任による予防、原因菌・がん細胞の遺伝暗号解読による副作用、耐性から

の克服などが重要課題になるであろうと締めくくられた。

終わって懇親会には50名近くの先生方が出席され和気藹々のうちに終了した。

平成11年10月14日(木)千葉京成ホテルにおいて役員改選後初の役員会が開かれた。役員自己紹介、総会報告、会計現況報告のあと協議事項として名簿改訂の件(発行期限、会員の選定など)、今後の運営方針(役員会開催時期・回数、「会報」の発行など)、次期総会日程・内容などについて協議された。名簿改訂については小委員会にて検討、会報の発行は費用の面から当分は困難、次期総会は5月開催を目標に次回役員会にて検討することとなった。新役員は次の通り

〔会長〕 渡辺 武(昭27)
〔副会長〕 香田真一(昭31)
〔庶務〕 茂又眞祐(昭22)
秋葉哲生(昭50)
〔事業〕 大浜博利(昭27)
神田収茲(昭32)
若新政史(昭38)
武者廣隆(昭40)
〔会計〕 石橋 祝(昭22)
阿部一憲(昭39)
〔監査〕 国井光智(昭21)
三枝一雄(昭32)
〔支部長〕 大浜博利(昭27)
三枝一雄(昭32)

第16回九州るのはな会

第16回九州るのはな会が平成11年10月30日、熊本市にあるホテルキャッスルで石川孝先生(熊大耳鼻科名誉教授 昭和35年卒)ならびに奥様の美智子先生(昭和33年卒)のお世話で行われた。九州るのはな会が発足したが今から20年前で、

したがってほぼ毎年行われてきたことになる。会場であるホテルキャッスルは、熊本城の堀端にあり、夜は城のライトアップで華麗な景色を眺めることが出来る。出席者は11名で「料理の鉄人」でテレビにも紹介された斉藤隆士氏の薬膳料理を美味しくながら、楽しい一



時を過ごした。話し足りないところは二次会にまで発展して親睦を深めることが出来た。九州るのはな会は、これまで20年間会長をおつとめいただいた古寺秀喜先生(昭和22年卒)に代わって、谷川久一(昭和32年卒)が会長をつとめることになり、次回は北原白秋の故郷である福岡県柳川で開催する予定である。九州るのはな会は、沖縄を除いた会員総数66名で、今後出来るだけ若い会員の方々にも出席して戴けるよう、先輩の先生方の学術講演や同窓会本部からも出席して戴き、大学の近況などお話戴けるよう努力したいと思っている。(谷川久一・昭32)

栃木県のるのはな会の現況

栃木県のるのはな会・会員はおおよそ160名位と思われまふ。なぜ、位かと言いまふと官公立病院の医局員の出入りに関しては正確な人員の把握が困難なためです。

平成元年の頃は110名前後であったと記憶しております。ここ10年間で、何故か、50名前後の増加があったかを分析しますと、独協大学における教授ポストの増加や、栃木県J A厚生連合会マロニエ・メジカルセンターおよび塩谷総合病院への増員などがあげられます。

このように、会員は宇都宮を中心にして栃木県内各地で活躍しております。「るのはな」を「冠」とした会をあげてみますと、まずは栃木県のるのはな会・宇都宮のるのはな会・独協大学のるのはな会および栃木県のるのはな会ゴルフという親睦の集いがあり、学問では栃木県のるのはな外科医会・るのはな生活習慣病研究会があげられます。

屈辱に耐えなければなりません。「るのはな」という同門のよしみで、保険や医療経営の事、医師会活動のことなど、それぞれの悩みを話し合い先輩と後輩が親睦を深め、ある意味では助け合っております。

しかし、悩みもあります。それはどこの県でもそうだと思いますが、若い会員の参加が少ないという事です。栃木県のるのはな会の初代会長は(故)石川丹五先生(大6卒)・第二代会長は渡辺宗次先生(昭10卒)で、現在は高村良平先生(昭23卒)が第三代会長としてその重責をはたしております。

そして、るのはな会本部との連絡役は柴崎晃先生(昭28卒)が本部の常任理事となり、会長代行として活躍しております。

医師会活動としては片山一郎先生(昭25卒)が平成9年まで栃木県医師会会長を務められ、また明石康三先生(昭32卒)も小山市医師会会長として活躍しております。

加瀬昭一郎先生(昭26卒)・本多陸人先生(昭42卒)は現在も栃木県医師会・理事として医師会の運営にあたっております。

そのほか審査委員などは枚挙にいとまがないので割

愛させていただきますが、特筆すべきは、早乙女勇先生(昭48卒)がボランティア活動の一環として阪神大震災に際しては医療救助活動に参加したり、僻地の孤島に診療所を開設したりして僻地の医療援助をしていることです。また、若い海老沼光治先生(昭40卒)はゴルフ・クラブのクラブ・チャンピオンになったりして、るのほな会会員の多芸ぶりを披露しております。

最後に栃木県における「るのほな会」関係者の役職を表にまとめましたので参考にして御連絡などに御活用ください。

栃木県るのほな会

会員160名

会長 高村良平(昭23)

幹事 柴崎 晃(昭28)

坂田早苗(昭34)

長井千輔(昭50)

毎年1月頃に大学より講師を2名お招きして、総会・懇親会を開催しております。

宇都宮市るのほな会

会員52名

会長 高村良平(昭23)

幹事 柴崎 晃(昭28)

坂田早苗(昭34)

杉田敏夫(昭50)

毎年7月頃に総会・懇親会を開催しております。

独協医科大学るのほな会

会員数10名

会長 島田晃一郎(昭37)

定期的にではないが、必要に応じて時々、開催しています。

るのほな生活習慣病研究会

会員150名

会長 片山一郎(昭26)

事務局・世話人

杉田敏夫(昭50)

高村良平(昭23)

師尾 武(昭24)

柴崎 晃(昭28)

鹿島 洋(昭30)

加瀬昭一郎(昭26)

坂田早苗(昭34)

大宮安紀彦(昭53)

小池正造(昭53)

平成11年より発会し、年1～2回の会合をします。

新進気鋭のるのほな会を講師にお迎えして勉強もします。

今年は川村功先生の「肥満について」

栃木県るのほな外科医会

会員45名

世話人代表 柴崎 晃(昭28)

世話人 坂田早苗(昭34)

福田武雄(昭42)

年に3～4回、大学教授を招聘し講演を聴き勉強します。通算32回を数えました。

栃木県るのほな・ゴルフ

会員20～30名

幹事長 前回の優勝者

副幹事長 前回のブービー者

春夏秋冬と4回開催され、通算すれば70回ぐらいにな

ると思われれます。優勝はグロス75前後なのでハイ・レベルなコンペといわれております。るのほな会員の活動

栃木県外科医会会長

水沼三郎(昭23)

副会長 坂田早苗(昭34)

栃木県労災指定医協会

会長 柴崎 晃(昭28)

副会長 大井利夫(昭35)

栃木県内科医会会長

片山一郎(昭26)

栃木県病院協会

副会長 大井利夫(昭35)

会員の活躍している病院

独協医科大学病院

教授

嶋田晃一郎(昭37)：胸部外科

崎尾秀彰(昭44)：麻酔科

稲葉憲之(昭47)：産婦人科

福田 健(昭48)：アレルギー

堀 雄一(昭52)：生理学

丹羽 章(昭38)：微生物学

助教授・講師

門馬公経(昭42)：第二外科

杉田洋一(昭49)：胸外(心)

長井千輔(昭50)：胸外(肺)

国際医療福祉大学病院

院長・外科教授

門脇 淳(昭41)

上都賀総合病院(上都賀郡JA)

院長 大井利夫(昭35)

副院長以下、全科の部長は

千葉大卒業生

(但し、産婦人科を除く)

栃木県JA厚生連合会マロ

ニエ・メヂカルセンター

センター長 川村 功(昭43)

下都賀総合病院

院長 川村 功(昭43)

石橋総合病院

院長 斎藤弘司(昭43)

両病院ともに副院長以下、

全科の部長は千葉大卒業生

塩谷総合病院(栃木県JA

厚生連合会)

院長 滝沢弘隆(昭40)

副院長以下全科の部長は千

葉大卒業生 4

済生会宇都宮病院

泌尿器科部長

森 偉久夫(昭50)

副部長 辻 博勝(平2)

栃木県がんセンター

麻酔科部長 岡 龍弘(昭55)

(坂田早苗・昭34)

るのほな同窓会

静岡県支部の現状

静岡県には現在会員が約

230名おり、千葉県や東京都

に比べれば桁が違うが支部

としては比較的規模の大き

い方に入るのであろう。中村

武(昭20)前支部会長による

と、千葉医専時代からの眼

科教授であった伊東弥恵治

先生(東大卒)が浜松市の出

身で、静岡県出身の学生の

面倒をよくみてくださった

ことが支部の開設の原動力

になったとのことである。

また伊豆の韭山町出身の相

磯和嘉元学長には名誉会員

になっていたにしている。

支部の活動としては従来

から2年毎に総会を開催し、その際に名簿を整備するのが恒例であった。総会の開催地も新幹線の駅が6つもあるという東西に広い地域性もあって、東部・中部・西部のちまわりというスタイルが定着している。

このような地域の問題が一面では県単位での同窓会の活動を難しくしているところがあり、むしろ東中西の各地域単位での行事の方が活発になる傾向があるよう

だ。総会を開いても距離的に離れた地域からは参加者が少なくなるとい問題もある。そこで2年前に支部会長が野末道彦浜松医科

大学名誉教授(昭33)に交代したのを機に、県単位での活動をより活発にすることを検討した。

財政的な基盤を充実させることがまず必要で、これには要するに会費をいかに集めるかの問題である。会員

にとって目に見えるような同窓会の活動がなければ会費徴収は難しく、そこで支部会報の発行というアイデアが出てきた。会報を定期的に発行し、その際に会費納入を依頼するということが悪循環を断ち切ることができのではないかと考えたのである。

まずは発刊することに意

義があるという訳でA4版4ページのささやかな創刊号を98年4月に出し、会費の振込用紙を同封して会員に送付した。これにより会費の納入率も飛躍的に向上し、会報も99年10月には第4号を発行することができ、

年2回の発行が定着しつつある。第2号からは8ページ最新号は12ページとなり、

会員の諸先生方のご協力により内容も充実してきたと自負している。

この関連で最近の「るのほな同窓会報」には毎回のよう静岡発の記事が載っていることは注目していた

だきたい。本部の活動と支部の活動は連携するものであり、相乗効果により全体としてのアクティビティー

が向上することを願うものである。

具体的なところでも会員名簿の信頼性向上に関して、同窓会本部のご好意で基本になるデータを抽出していただいたことが非常に役立っている。データベースは

これからアイデアを出し合って活発な支部活動を行ってゆきたいので、本部や他県の支部の皆さんの御支援をお願いしたい。

静岡県支部常任理事 宮本恒彦(昭54)

次回四金会のお知らせ

日時 平成12年2月23日(水)、午後5時30分より

場所 ペリエホール(千葉駅ビル5階)

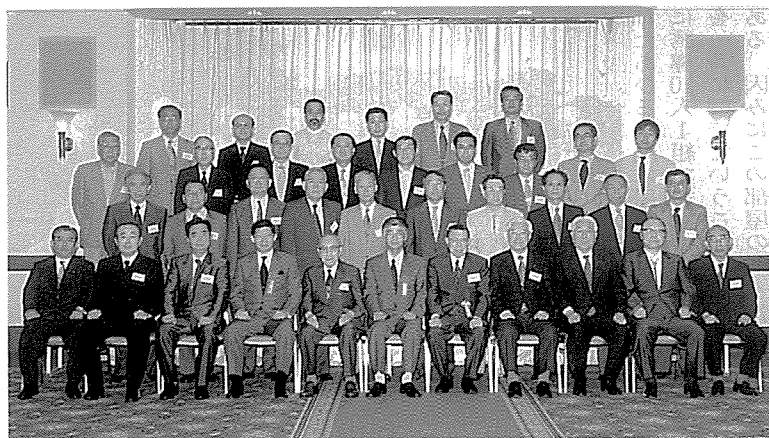
個々に御連絡致しませんが、是非奮って御参加下さい。

会費は30000円

あのはな同窓会 埼玉支部総会

今年の暑さはただならぬものでしたが、平成11年8月28日土曜、午後3時より浦和東武ホテルにて、開催いたしました。出席者38名の熱心な方々の御参集をいただき盛会のうちに終わりました。

まず新藤清司先生(昭16卒)、峰岸一雄先生(昭15卒)、山本博信先生(昭24卒)、上野恭一先生(昭31卒)、4氏の物故者に黙祷を捧げ、続いて、水間支部



親会会長は井上新支部長の

つぎに懇話がありまして、21世紀に向けて変わっていく千葉大学医学部についてのお話がありました。

長の挨拶、会計庶務の報告を行い、次に21世紀をふまえて規約の改正、新支部長に井上幸万(昭27卒)、副支部長に田口勝(昭34卒)、吉川宏和(昭40卒)、済陽高穂(昭45卒)、の諸先生を選出いたしました。続いて鈴木忠男先生(昭23卒)の勲5等双光旭日章のお祝い、米寿喜寿のお祝いのあと、阪理事から本部よりの通達報告がありました。講演会は東京女子医大心研内科教授、笠貫宏先生(昭42卒)、より循環器疾患の最近5年間のトピックスという演題でスライド10枚におよぶ、名講演をいただき、続いて千葉大学医学部長・免疫学教授、谷口克先生(昭42卒)、より21世紀に向けて変わっていく千葉大学医学部についてのお話がありました。

挨拶、名尾良憲本部名誉会長(昭13卒)の乾杯の音頭ではじまり若い先生の紹介、伊藤敏夫社保審査委員長(昭30卒)のお話などあり、最後に来年度当番熊谷冠木理事の挨拶でより一層盛会を期すとの事、和気藹々のうちに解散しました。

出席者名(来賓) 谷口、笠貫、(会員) 名尾、水間、鈴木、木村、土屋、高橋昭石井、新井、井上、有田、清水民、清水、有馬、伊藤横田、高橋、森、今井、田口、阪、松山、藤塚、谷合、妹尾、吉川、栃木、冠木、佐々木、諏訪、西村、済陽大友、野口、菱沼、中村、得丸、の諸先生。

(石井邦夫・昭26)

北陸あのはな会

富山医科薬科大学医学部和漢診療学講座助教授の伊藤藤隆(昭56卒)先生が本学部門の教授に就任され、そのお祝いの会が平成11年7



月29日、富山市の奥田屋にて開催されました。会には片山喬(昭30卒)副学長兼附属病院長の祝辞にひきつづき、磯村勝美(昭43卒)先生による乾杯の御発声にてはじまりました。伊藤教授により漢方診断学部門新設の経緯について説明があり、さらに同部門は漢方医学の教育プログラムの研究などを行う本邦では他に類を見ないユニークなものであり非常にやりがいのある領域であるとの力強い言葉に参加者一同今後の発展におおいに期待を寄せました。

その後おのの近況などに

クラス会

白兔会 (昭17卒)

昭和17年9月卒業の我がクラスは、長い間「白兔会」と称して、春は総会、秋は例会を開催して親睦をはかってきた。卒業のときは79名



が二次会へと町へくりだしました。出席者は8名、片山喬、磯村勝美、寺澤捷年、浜崎智仁(昭46卒)、布施秀樹、檜山幸孝(昭51卒)、伊藤隆、長谷川ともみ(布施秀樹・昭51)

だったが、現在は35名になってしま、年齢もみんな80歳以上の高齢となり、体調のすぐれない者が多くなってきた。そんなわけで、平成9年秋の卒業55周年記念の会以降は、東京周辺に住んでいる有志だけによる懇親会を開催することにし、場所は交通の便を考えて、東京ステーションホテルにすることにしました。本年秋の懇親会は、11月14日(日)に開催したが、級友9名、故人の奥様方5名の計14名が出席し、近況報告をしたり、感想を述べたりして、久しぶりになごやかに楽しい歓談の一時を過ごすことができた。今回は、特に秋田県大曲市から下山君が、静岡県清水市から松永君が、遠い所から参加して楽しい話をしてくれた。来年の春も又元気で会おうと約束して名残を惜しみつつ散会した。

出席者 写真の前列向って左から、村上夫人、木村夫人、佐久間夫人、内田夫人、浦部夫人、後列向って左から、水間、高橋、下山大村、松永、浦田、本間、窪田、藤村。(水間正冬)

クラス会 (昭21卒)

今年平成11年のクラス会、例年より予定を早めて10月16日、市川で行われた。午後3時、本八幡駅改札口集合、タクシーに分乗、まず宮内庁管理の新浜鴨場へ。市川在住の今回の世話人、渡辺誠之さん達の御骨折での見学という訳でこの日を選んだのである。

400坪をこえる池を中心のこのいわゆる御猟場は、まさに都会の中の別天地、静寂そのものである。まず控の建物の一室に通される。通常はビデオによる説明があるのだそうだが、この日は土曜日なので関係者からの説明、色々な鴨の剥製など眺めながら、ここ独特の鴨の捕獲の仕方をきく。搔手網で捕えるこの方法は古く江戸時代、大名などにより行われたもので、訓練さ

れたあひるを園に用い、溝に誘導10人1組で飛立つ鴨を一斉に網でというところである。因みにこの部屋の隣が皇太子殿下が雅子妃にプロポーズしたところ。そこを一寸のぞいて現場へ。

例年11月半ばから翌年2月まで、在日外交官その他が、宮内庁の招きで次々訪れこの鴨を楽しんでいる。但し鴨は自然保護の観点から全て標識をつけて放すので、餌のあとの鴨料理はすべて合鴨とのこと。

現場の覗き窓から見た池には、あひるも交えてであるが、数百羽の大群が見られた。この庭で記念撮影、再び車に分乗して市川市入船の「かも苑」に到着。名



物の鴨すき…こも合鴨であるが…に舌つづみうちつつ、歓談。午後8時半、来年度の再会を期して散会した。

参加者 写真

前列左から、郡山春男、岳繁雄、新井正、中島浩二夫妻、小杉夫人、阿部謙三、小杉精作、後列佐藤壹三、平川勇、齊藤豊一、萩野裕、山中茂

齊藤弘、渡辺誠之、興村圭一、本間三郎、宴会のみ参加国井光智。因みにクラス74名中物故者29名(含原爆死2名)。(佐藤壹三)

もぐら会 (昭23年)

卒後51周年もぐら会は、平成11年9月18日東京駅ステーションホテルで行われた。集いし者39名。開会に先立つ写真撮影は、煉瓦造りの駅正面をバックに撮られた。行き交う人の視線には些さか照れた。

前田君司会のもと、まず、前年度逝去の手島第一郎、丸山正鷹、小林康郎、宮島健郎4君の冥福を祈って黙祷。乾杯は吉田亮君。彼はさ

きの叙勲祝賀会の謝辞、近況について行われ、一同晴やかに杯を乾した。次いで吉岡君から毎度緻密な会計報告。堀江君より当日配られた彼の労作、クラス名簿に就て説明と提案があり一同諒承。

感謝する。次で、全員必ず一言宛あつて然るべし、との司会の指名により、一同交々立って現状、思う処など語った。石巻から新参加の小倉君は今や大学長とはいえ学生時代と変りなく、長野からの小西君は毎日の胸腔洗滌の身を推しての頑張り、嶋村君は昨年千葉で参加できた感激を再びと、お礼のつもりで奥さんの運転で来たと言った。各人の述べる処は最近の世相、後輩に悲憤慷慨するあり、全てに無欲の隠遁の弁、親子二代の診療を楽しむあり、また趣味に明け暮れる、など様々であった。疾き時の流れを有効に案配する司会市川君の心遣いは流石と感服。



終りに当り、求められて伊東より一言。わがもぐら会は既に三割以上の友人を失った。さきの大戦

での同世代戦死者を併せ思う時、彼らが生き残した寿命は、われらが受けて、楽しみつつ長く生きるべし。年齢従心を超え、心に従いて行方も矩を踏まず、とか。諦めは明らかに通ず。物事を明るく見て、心のままに行うべし、とアピールし、来年の再会を約した。先程の記念写真を速くも手にし、一年の別離を惜しみつつ散会した。

尚、来年、20世紀最後のもぐら会は、幹事、高村良平、木村滋両君、9月24日(日)、同じ東京駅ステーションホテルでと決定した。多数の参加を希う。

昭35の阪、市村、故岩崎勇各務正暉の奥様達。昭34の東、紅露、清水(精)、田口その他赤星と飯田暢子ご夫妻等、あとは他大学へ行った人達です。卒業以来45年ぶりの再会もあって、楽しいもあがった会でした。次回からは会の名称を「一八会」として、C1・C2・D・A・Bコースの人達にも呼びかけて盛大に開催したいと思いますので、是非ご出席下さい。(阪 信)

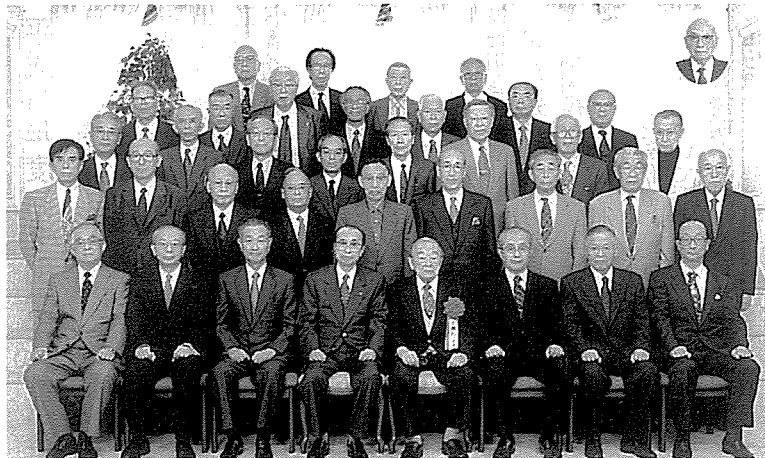
出席者 有賀光、伊東和人、伊藤力、板垣修造、市川平三郎、岩間定夫、上野高次、海老原恒雄、小倉保己、大久保欽司、大津鏡、大和田耕一、木村滋、工藤興一、窪田金次郎、窪谷満雄、黒須吉夫、小西義男、柴田鉄郎、嶋村欣一、杉山静也、高村良平、多賀登義、竹内博通、奈良四郎、中嶋元、中島博徳、西村文夫、萩原彌四郎、平岡眞、藤井日出男、藤崎滋、堀江昌平、前田裕、松下幸二、宮崎隆次、吉岡宏三、吉田作、吉田亮。(伊東和人)

3時間、二次会はソニックスティールの31階のレストランで大宮から東京までの夜景を眺めながらの3時間、楽しく語り合ったが、それでもたりぬと半分はメンバーは三次会の大宮南銀座のバーへ向かった。本学関係の出席者は



卒後50周年記念
六葉会

毎年行なわれている六葉会も、今年は卒後50周年ということで千葉で開催することとなり、10月31日センチタワ―23階東天紅で行なわれた。大学のものはな会より卒後50年につき会費は免除になりますとの連絡をうけ、50年の年月のすぎることの早さに驚いた次第である。右のようなわけで幹事、実行委員の発案で千葉大学医学部(旧附属医院)構内の見学が計画され、



のはな同窓会事務の秋田さん、清水さんのご協力により、医学部の航空写真、構内見取図などをいただいた。参加者全員に配布し屋上に於て記念講堂、新病院、千葉市内などを眺めたが、50年前と眺望の全く異なったことに全員驚ろきの声をあげた。ひきつづき旧精神科病棟、学生課跡地、七天王塚などを見て歩いたが連絡道路で目の下に旧運動部部室の建物が残されているのは懐かしかった。一方、学生会館がなくなって凡秋谷の手前が駐車場になっているのはさ

びしかったが、これも時代の流れで止むを得ないことだろう。私達は戦時中、入学し、満身に勉強しなさいと千葉市郊外に勤労動員にかり出され松根油を掘っている時に千葉の空襲にあい基礎教室など焼失したため、附属病院があらわただし長野県下伊那郡の天龍川沿いに疎開することになってこれに同行した。間もなく終戦を迎えるという激動期をすごして来たクラスであり、このような苦難の道を歩んだクラスは他にはみられないと思う。このような激動をくぐって来たわれわれのクラス16名も本年の物故者 武本吉浩君、小坂耕二君、藤塚次雄君の3名を加えて51名も他界されたのには驚いたが出席者も36名の多くに達し、中には腰痛で杖を使っている人もいたが出席者全員元気で徳政幹事の司会で幹事代表として赤畑君よりこの一年間の経過報告、会計報告がなされ、物故者への黙祷につづいて恩師百瀬剛一先生より御挨拶をいただいたが90才をこえているとは思えない元気さには全員感心させられてしまった。宴会は彦根市よりかけつけられた奥野君の乾杯で始まったが、本年は卒後50年ということで出席者全員から近況報告をいただくことにしたため、なかなか話は終らず、家族のこと、健康のこと、趣味の話、医学の話などいろいろで未だに現役で働いている人、既に退官

第24回のはな美術展開催される

平成11年10月12日から18日まで7日間、東京銀座、ギャラリーひまわりで開催されました。出品者は昭和16年から42年までの本学卒業生22名と学生1名で、書、版画、水彩、油彩、パステルの作品39点が展示されました。ここ数年の間に新規入会の会員4名が加わり、それぞれ個性のある力強い作品を出品しており、本展の質の向上に貢献している。16日、午後会場に参集して例年通り合評会を1時間ほど開いた後、会場を資生堂に移して、20名が参加、懇親の夕食をともしました。今回は特に会員、斎藤宗寿(昭和16年卒、耳鼻科)が先の大戦における自己の重



して自由の生活を楽しんでいる人などさまざまであった。益々宴会は盛り上がり話はつきなかつたが来年の東京での再会を約し、新潟県新井市より来られた岡田君

の閉会の挨拶と三本締めで散会となった。出席者は赤畑正光、伊佐博夫、石井克巳、石井貞一、市村公正、井上通、太田広三郎、大御恒久、岡田宏一、

99年 第24回のはな美術展出品目録

- | 氏名 | 年次 | 作品名 |
|------|----|------------------------|
| 加瀬幸雄 | 22 | 酔書 80×75 |
| 斎藤英一 | 16 | 黄色の女 8F 花のある静物 8F |
| 井上通 | 24 | 人物 静物 10号 |
| 長尾透 | 16 | 門前 6F |
| 島田哲男 | 41 | 裸婦 6号 水彩 新宿御苑 4号 パステル |
| 大村光 | 17 | 版画 アトリエ風景 クリスマス・ツリー |
| 柴崎晃 | 28 | ばら園 15号 木の俣溪谷 10号 |
| 榎本貴夫 | 47 | シドニー'97 4号変形 ボンベイ湾 8号 |
| 仲村長正 | 29 | タイの宮殿 10F 油彩 |
| 大木 勲 | 38 | 鬼怒川晩秋 20P |
| 石谷治彦 | 24 | 鴨川風景 15号 水彩 若者の声 リトグラフ |
| 神山英明 | 22 | 裸婦 15F 箱と瓶 8F |
| 辰野治郎 | 34 | E夫人 6F Y画伯 6F せせらぎ 10F |
| 宮下久夫 | 38 | 公園 8号 水彩 |
| 斎藤宗寿 | 16 | ひまわり 8F |
| 酒井忠昭 | 42 | 高原 8F 岬 8F |
| 山川晋吾 | 24 | ブランコ 15P アルルカン 4F |
| 山口庚児 | 31 | 北の大地 30P |
| 吉川広和 | 40 | 静物 10号 百年の佇 20号 |
| 川村孝子 | 36 | 若いひと 20号 静物 20号 水彩 |
| 野口真理 | 40 | ブルーターニユの古木屋 20F |
| 今井力 | 22 | 油彩 |
| 不出品 | | 山口宗彦 38 |
- 1999・10・12-18 ギャラリーひまわり 順不同
- 〒169-0007 東京都新宿区 石谷治彦(昭和24年)
- 高田馬場1-25-29 石谷医院内
- TEL 03-3200-0078 FAX 03-3200-0253
- るのはな美術展事務所 奥野文雄、神山一郎、郡司宗文、斎藤三夫、篠本直、下坂正次郎、霜島正雄、鈴木一郎、鈴木隆、高橋健男、塚原仁、徳政義和、中野邦一郎、中村彰、幡野永由、原山嘉彦、福山正臣、藤沢博、藤岡玄治、美島俊仁、南谷幹夫、森弘、山川晋吾、山口寅三、吉成勇、米川潔、渡辺昇。(徳政義和)

平成11年度第2回常任理事会議事録

日時 平成11年11月24日(水)
16時〜17時30分

場所 ペリエホール 椿の間

出席者 井出源四郎、大藤正雄、大浜博利、沖真澄、小幡裕、貫洞一夫、萩原彌四郎、近藤洋一郎、阪信、柴崎晃、長澤仁一、茂又眞祐、山上健次郎、渡部武、佐藤甫夫、嶋田裕、増田善昭、中島祥夫、鈴木信夫、矢野明彦各理事。

開会に先立ち、井出会長より御挨拶があった。

議題

一、叙勲者・昇任者の四金会招待について近藤副会長より説明があり承認された。

二、学外研究助成の選考に関して嶋田選考委員長より選考結果の報告があり、9件の採用案が出された。予算執行状況の中間報告内容(報告事項)を了承した後、本採用(下記)が承認された。

三、次年度の行事日程について木内理事より説明があり承認された。

四、同窓会賞選考委員会の交代について佐藤理事より説明があり、2期選考委員を勤めた小幡裕、大藤正雄(学外)、および嶋田裕、西野卓(学内)

に代わり、栗原稔、島崎淳(学外)、および木内政寛、大沼直躬(学内)の各氏が選出された。

五、その他

以下の項目について討議された。

(1) 参与の設置について
(2) 記念碑および周辺の整備について

報告事項

一、予算執行状況(中間報告)について中島理事より報告があった(前述)。

二、発行状況が鈴木理事より報告があり、会報のカラー化の評価、広告について討議があった。

三、名簿発行の進捗状況が嶋田理事より報告があった。

四金会 引き続き同所で四金会が行われた。税所理事の司会で、井出会長の挨拶、近藤副会長より平成11年春の叙勲者、同年秋の叙勲者、同年医師会表彰者の紹介、叙勲者を代表して、相磯敬明、萩原彌四郎、窪田金次郎各氏よりご挨拶をいただいた。続いて、教授昇任、助教授昇任、講師昇任の紹介があり、昇任者を代表して、野村文夫、石倉浩、瀧口正樹各新任教授から、吉永勝訓、福武敏夫各新任助

第1回るのはな同窓会学外研究助成

教授、軍司祥雄、峯清一郎、伊藤博、斎藤幸雄各新任講師より挨拶があった。多くの叙勲者、昇任者の出席をいただき和やかな歓談の時間、世代を越えた交流で溢れた会であった。

一九九九年度のるのはな同窓会学外研究助成は次の九件に決定しました。

青柳 正彦(国立療養所下志津病院アレルギー科医長、小児科、千大昭62)
「皮膚病変をもつ自己免疫疾患患者におけるneCLA(Continuous lymphocyte-Associated Antigen)陽性細胞の解析」

安藤 稔(東京都老人医療センター、腎臓内科学、千大昭59)
「慢性腎不全と老化進展の分子生物学的メカニズムー腎におけるKlotho遺伝子発現の解析」

木村 邦夫(千葉社会保険病院健康管理センター長、内科学、千大昭45)
「非ウイルス性肝細胞癌の疫学と病態の究明、ならびにそれにもとづく診断と治療および発癌予防の方策の確立」

木村 直弘(千葉県救急医療センター、形成外科、千大昭61)
「組織体外循環モデルを用いた創傷治癒過程の研究」

三枝 敬史(公立長生病院脳神経外科医長、脳神経外科、千大昭62)
「てんかん原性獲得機構におけるアポトーシス・神経新生・軸索ガイダンスの関与」

坂本 昭雄(国保成東病院長、外科学、千大昭48)
「成東町における小児のHelicobacter pylori感染の状況」

坂本 忠(千葉市立病院精神医学、滋賀医大昭60)
「うつ病患者の性格傾向ー遺伝子解析および神経画像解析による検討」

福澤 茂(船橋市立医療センター循環器科副部長、循環器病学、千大昭57)
「虚血性心疾患に対するインターベンション後の心筋血流・代謝の動態及びその長期予後」

山口 哲生(JR東京総合病院部長、呼吸器内科、千大昭53)
「サルコイドシシスの発症・悪化におけるストレスの影響」

同窓会費の改訂

平成12年度から年会費が5000円となります

るの は な 同窓会では、ここ数年来同窓会活性化をすすめ、従来からの会報の充実、会員名簿の3年毎の改訂発行、医学部施設助成、るの は な 分館助成に加え、るの は な 同窓会賞の創設、学生用図書の特典助成、学外研究助成、同窓会報の一部カラー化などの事業をすすめ、その成果が定着しつつあります。また、事務量の増大に伴い、事務局に非常勤職員を一人増員、コンピュータの導入などもはかっております。

これらの事業の基礎となる財源は会員諸先生からの協力をお願い致します。

同窓会費の自動振替のお願い

同窓会では事務省力化のため口座自動振替による会費納入をお願いしております。

るの は な 同窓会総会の御案内

日時 平成12年6月25日(日)

午後2時より

場所 椿山荘

03-3943-1111

編集後記

故岡本昭三事業担当理事の依頼により、100号(平4)から本会報の編集にかかわるようになりました。その後、編集委員の負担を軽減するようにとの井出源四郎会長や岡本理事の配慮により、編集委員会が組織され、102号(平5)から112号(平8)までは責任者として編集に携わりました。

この間に、紙面と活字が拡大され、また発行が年3回と定着するようになりました。編集委員には学生時代に新聞部に属し、本会報の発行を実際に経験された方が多く、この間には大変協力をいただきました。

編集委員長が鈴木信夫理事になってから、カラー化が試行され、また紙面に斬新さが加わってきています。今、大学を含めて世の中は大きく変革しようとしています。21世紀にも、本会報はるの は な 同窓会員に向けて貴重な情報を提供し続けることを願っております。

(嶋田 裕・昭35)

